



降りしきる雨の中、式典は肅々と進められた
世田谷山観音寺・特攻平和観音堂



報特攻

平成22年11月

第59回特攻平和観音年次法要

第85号

財団法人 特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
〒105-0014 東京都港区芝
2-5-19TAビル
電話 03 (5730) 1016
FAX 03 (5730) 1017

http://www.tokkotai.or.jp
振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能
発行人 羽淵徹也
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

第59回特攻平和観音年次法要… 1
8月15日の靖國神社 …… 7
終戦の日に因んで …… 11
世界が驚倒した特攻隊の出現と
感動―日本人よりも深く洞察し
共感を寄せる外国人― …… 13

目次

講演録「世界の未来を開いた
昭和時代」 …… 18
未完の遺稿の語りかけるもの
『黒鳥は忘れない』余聞 …… 25
栃木県護國神社「特攻勇士之像」
奉納除幕式に参列して …… 33
アヘン戦争 …… 34
特攻観音に鎮座します
空挺関係の御霊に捧ぐ …… 36
レイテ空挺作戦の思い出 …… 37
山本卓美勤皇隊長・二瓶秀典
同副隊長の母校仙台陸軍幼年
学校訣別訪問飛行 …… 39
図書紹介 …… 40
報告「特攻隊戦没者数」 …… 42
事務局からの報告等 …… 43

日時 平成22年9月23日(木)
14時～15時10分

場所 世田谷山観音寺・特攻平和観音堂
参列者 御遺族33名 御来賓・会員等

式次第

約220名、他に当日受付の一般
参列者40数名、合計約300名

司会 乘兼 英史

梵鐘点打 三回 倉形 寛
式衆入堂 世田谷山観音寺山主他

国歌斉唱 トランペット 田槽 雅之
山主願文 特攻平和観音経

神 儀 駒繫神社宮司 澤田 浩治
世田谷山観音寺山主 太田 賢照

修祓の儀・降神の儀・献饌の儀
祝詞奏上・玉串奉奠・撤饌の儀
祭文奏上 特攻平和観音奉賛会会長

挨拶 世田谷区長 熊本 哲之
献吟 一誠流 石橋 一歌
献歌 世田谷コールエーテ合唱団

「ふるさとの四季」より秋二題
指揮 大穂 孝子

奉納献奏「海ゆかば」
トランペット 田槽 雅之
サクソフォーン 鈴木 隆春

全員合唱「海ゆかば」
ラッパ献奏 陸軍衛兵隊・海軍衛兵隊

献吟 石橋 一歌
献吟 逢坂 龍信

司偵振武隊長 竹中 隆雄
昭和二十年四月七日
嘉手納沖で戦死
君がため何惜しからん桜花
時来たりなば散れいさぎよく

第四銀河隊 片村 利男
昭和二十年四月七日
南西諸島方面で戦死
皇の命のまにまに 丈夫は
只敵艦に玉と砕けん

焼 香 特攻平和観音奉賛会

会長 山本 卓眞

御遺族各位

御来賓各位

会員・一般各位

式衆退堂

池前にて、住職 読経(般若心経)

神官 修祓・祝詞奏上後、式衆退場

直 会 15時30分〜16時30分

第59回特攻平和観音年次法要

平成22年9月23日(木) 秋分の日、世田谷山観音寺・特攻平和観音堂において、第59回特攻平和観音年次法要が厳かに齋行された。

台風12号小笠原近海北上中、本州南岸寒冷前線停滞、大雨、所により雷注意等の予報どおり、朝から雨模様となり、時折激しく降りしぶく有様で、これまでほとんど毎回、爽やかな秋分の日の法要とのイメージは崩れ、一種の悲壮感すら漂う法要とはなつた。

この年次法要は、一昨年来、神仏習合(詳しくは当協会会報第73号「平成19年11月発行」2頁以下参照)で行われている。そこで、先ずは午前中、地元「駒繫神社」に参詣した。

なお、近年、神仏習合に関して、注目すべき催事が報道されたことは、昨

年の当会会報『特攻』第81号(2頁)に掲載したが、念のためその概要を再録すると、平成21年6月11日、高野山真言宗総本山金剛峯寺金堂において、「神仏合同国家安泰世界平和祈願会」が齋行されたが、同祈願会は、近畿7府県の有名151社寺でつくる「神仏霊場会」(会長 森本公誠・東大寺長老)が開催したもので、当日は、40の寺院と21の神社から僧侶や神職約170人が参列した、とのことである。なお、同会は、明治維新の際、神仏分離による廃仏毀釈運動の起こる以前は盛んであった、神仏を一緒に崇拜する精神風土を取り戻そうと、平成20年3月に設立されたもので、今後は定例法要として年に1度、祈願会を催し、寺院と神社で交互に法要を営むとのことである。

また、同じ仏教界においても、宗派間の対立の和解に向けての大きな流れが現れてきた。その一つとして、天台宗総本山・比叡山延暦寺の半田孝淳座主が、平成21年6月15日、高野山真言宗大本山・金剛峯寺を訪れ、同寺宗祖空海の誕生を祝う同寺最大の法要「弘法大師降誕会」に同寺の松長有慶座主と並んで参列したとのこと、天台座主が高野山を公式に参拝するのは、両宗の約1200年の歴史の中で初めてのことである。空海と天台宗の開祖・

最澄は晩年、対立したとされるが、相互理解を深めようと昨夏から、半田座主の高野山参拝を準備してきたとのことである。この日午前8時10分頃、半田座主は和やかな表情で金剛峯寺に到着。大師教大講堂における法要では、松長座主と並んで壇上に参列し、稚児大師像に甘茶をかける「灌沐作法」を行った。その後、奥之院に向かい、空海が入定している御廟を参拝し、本坊で松長座主と会談。半田座主は「手を携えて世界平和と仏法の交流に邁進できれば」と話したという。

更に、読売新聞の報道によれば、海

法王と英女王 初の公式会談



カトリックと英国国教会 470年ぶり「和解」

16日、エディンバラの宮殿での秋の行事に臨んだローマ法王ベネディクト16世(左)とエリザベス女王(右)とエリザベス女王(AFP)

外のキリスト教界においても和解への大きな動きがあり、今年の9月16日、ローマ法王ベネディクト16世が、英国公式訪問のため北部スコットランド地方のエディンバラに到着、ホリルー・ドハウス宮殿でエリザベス英女王と会談した。法王の英国公式訪問も、英国国教会の頂点に立つ女王(国王)との公式会談も、カトリック教会に反発したヘンリー8世が1534年に英国国教会を創設して以来初めて、という歴史的な出来事となった。この会談後女王は「我々に共通するキリスト教を世界平和に役立てましょう」とのスピーチを行い、法王も英語で「英国国民の生活のあらゆる所に、キリスト教は根付いている」と応じ、両教会の和解を強く印象づけた、とのことである。

宗教界の新しい動きとして注目されるが、このことに関して思い出されるのは、故名越二荒之助先生が提唱しておられた「世界宗教サミット」の開催である。日本人こそ、それを提唱するのに最も適している。多くの外国人も認めているように、「日本人は、世界で最も宗教に対して寛容であり、いろいろの宗教と同居し調和する能力を身につけている。これが日本的個性だ。日本人はどうして靖國論争に巻き込まれるのか。靖國神社は、世界のどこに

もない日本の伝統的信仰で祀っているから、すばらしいのだ。世界各国は、伝統的信仰の原点を見失っている。そのため味気ない宗教上の論争が絶えないし、今も続いている。そもそも他の宗教と喧嘩する宗教は、偏狭なる邪教ではないか。邪教ばやりの世界に向かって、日本人の汎神的宗教観を発信せよ。現在の世界は、経済サミットや政治サミットで忙しい。神社本庁あたりから世界に向けて『宗教サミット』を呼びかけたらどうか。新・旧のキリスト教・イスラム教（シーア派・スンニ一派）、ユダヤ教、ヒンズー教、仏教等の代表者に集まってもらって、宗教や信仰の原点は何か、相互理解を促すべきではないか（名越二荒之助著『史実が語る日本の魂』より）と。

さて、駒繫神社は、世田谷山観音寺の北東約400メートルの下馬4丁目に鎮座します古社で、昔から付近一帯の鎮守様として尊崇されている。

御祭神は、大國主命、又の名を子の神、子の明神とも言い、五穀豊饒の神であるとともに、源氏ゆかりの武運の神でもある。その謂れは、現在の社名が示すとおり、古くは源頼義、義家父子が奥州征討に当たって武運を祈願され、その後、頼朝公もまた、藤原氏征討に際して、武運祈願のため参詣され、愛

祭文

本日ここに、第五十九回特攻平和観音年次法要の日を迎えました。謹んで在天の御霊に申し上げます。

皆様方は、六十有余年前、我が祖国、民族、危急存亡に際し、一身を擲つて、空に、海に、陸に、散華されました。これらの特別攻撃隊の作戦は、日本人が育んできた精神文化の真髄が発揮されたものであり、人類史上、類を見ない輝きを放っております。今年もまた、平和平穩の内にこの法要を執り行うことができまことは、皆様のご加護のお陰であります。私達は、末永く、皆様のことを語り伝え、そして感謝の気持ちを捧げてまいります。

戦後私達は、皆様方のお気持ちを胸に秘め、国の再興、発展のために努力をしてまいりました。その結果、物質的、経済的には歴史上稀に見るような復興を遂げてきたようにも思えます。しかしながら、今、世界は、東西冷戦を終えてもなお、民族、宗教、貧困などに起因する争い事、資源、エネルギーの争奪戦、核の拡散、テロや海賊の問題など、国際社会は

多様化する価値観の中にあり、秩序も大きく揺らいでおります。それらの諸

問題に対する明確な解決の手段は、未だ見出し得ておりません。我が国周辺においても、北朝鮮の核やミサイルの保有、韓国海軍哨戒艦撃沈、中国の軍備拡充、外洋進出等、具体的で不安な事象が生起しております。一方国内においては、昨年以來、政権交代等起因する、政治、外交、安全保障などの、国の骨幹をなす分野においてさえ、混乱が続く、国際社会における我が国の地位も揺らいできているのが現実であります。

我が国が今、この苦境を乗り越えるためには、今一度、日本がこの風土の中で育んできた精神に立ち返ることが大事だと考えざるを得ません。私達は、特攻隊の皆様から、人としての在り方を学び、現在の苦境を乗り越えていく力を与えていただかなければならないと考えるのであります。

国内を眺めますと、あらゆる分野で、大きな変革、交代の時代を迎えているように見えます。ただその歩むべき方向は、未だ定まっているとは思えません。その方向や価値観を定めるために、特攻隊戦没者の皆様から学ぶべきこと

は多いと痛感するものであります。協会は、未だ変革の中にあります。会員の高齢化が進み、会員数の減少を来しております。また、公益法人に移行しなければなりません。当世田谷観音への月例参拝や、内外各地での慰霊祭参列、「特攻勇士之像」の護国神社奉納事業など活動は、引き続き実施してまいります。「特攻勇士之像」は、新たに大阪護国神社に献納しました。今年、栃木県、千葉県の各護国神社に献納すべく、事業を更に拡大継続してまいります。私達は、皆様方への慰霊顕彰活動を通じて自分を磨き、我が国を皆様方の志に恥じない国にするための努力を続けてまいりますことを誓うものであります。

在天の御霊、どうか私共をお導きください。そして、なお一層のご加護を賜りますように心からお願ひ申し上げます。

平成二十二年九月二十三日

特攻平和観音奉養会

財団法人特攻隊戦没者慰霊平和

祈念協会

会長 山本 卓眞



山主願文 太田賢照山主



祝詞奏上 澤田浩治宮司



祭文奏上 山本卓真会長

われた「特攻勇士之像」も、本山表門脇の代官屋敷前に、奉納された沢山の千羽鶴に飾られ、雨にもめげず凛々しく輝いて御座します。

本堂脇の特攻平和観音堂正面の祭壇には、菊や蘭や童胆など沢山の季節の生花が供えられ、香が焚かれ、寺域中央の蓮池には、大きな緋鯉真鯉が悠然と泳いでいる。池中に立つ大慈大悲の観世音菩薩（法隆寺夢殿の夢違い観音像を模して鑄造された菩薩像―その胎内にも、特攻平和観音像の胎内に納められている特攻勇士の霊璽簿の写しが納められているという）が、慈悲慈愛の眼を注いで、特攻勇士達の御霊と御遺族を始め参会の衆生をやさしく見守り給う中、やがて14時、法要は始められた。

山主、神官らの入堂に始まり、梵鐘三打、故野口清三会員に替わって今回から航空自衛隊幹部の倉形寛会員が真心を込めて撞く梵鐘の音は、余韻嫋々として樹間を流れる。次いで一同起立して国歌斉唱、山主願文奏上と続く。

祭主世田谷山観音寺太田賢照山主は願文の中で、特攻烈士の遺徳を讃え、「特攻勇士の諸霊は正に忠烈の龜鑑なり。諸霊が父母の恩愛を断ち、大忠、大孝、大義、大勇に徹せし崇高無比なる境涯に相到せんか誰か万斛の涙なきを得んや・唯、諸霊を慰め得るもの

馬芦毛を社前の松に繋いだという故事に由来する（詳しくは当協会会報第73号―平成19年11月発行―4頁以下参照）。下馬5丁目でバスを降り、公園横の表参道より入り、鮮やかな朱塗りの神橋を渡って、石造りの鳥居をくぐれば、そこは銀杏や樺、松や楓などの大木が繁る神域である。石段（男坂）又は坂道（女坂）を登った小高い丘の上の御社は、如何にも由緒深き古社、辺りは森厳の氣に包まれている。

あるが、高さ20メートルはあるのかという黒松の大木である。境内は実に綺麗に掃き清められていて、参詣者の心を引き締めてくれる。そういった雰囲気のある古い御社である。駒繫神社に詣でて身も心も清めた後、世田谷山観音寺に向かう。世田谷山観音寺の境内は、これまた松や樺、楓などの屋敷林に囲まれ、林間に苔むす古い堂塔の見え隠れする静寂・森厳の氣に包まれ、今日の雨に殊更しつとりと濡れて深淵の氣に満ちている。その境内には、雨にも拘わらず会員を始め沢山の奉仕の方々によって早くも受付等の準備が整い、雨対策も

とられていた。そして、法要開始のかなり前には早くも境内は、久々の再会を喜び合う元戦友達を始め、老若男女大勢の参詣者で活気づいてきた。特に今年は終戦65年の節目の年となったこともあってか、日本会議世田谷・目黒支部からは小野英之支部長以下18名の方々が、また東京都郷友会からは矢部廣武会長以下10名の方々が参列されたほか、一般参列者も多く、雨の中にも拘わらず、参列者数は前年を大幅に上回って約300名に達した。誠に有り難く、心強いことである。

平成19年の今日、第56回特攻平和観音年次法要に先立って開除幕式が行



挨拶 熊本哲之世田谷区長



梵鐘点打 倉形寛会員



献吟 吟 石橋一歌氏 笛 逢坂龍信氏



献歌 世田谷コールエーデ合唱団 雨に打たれながら指揮をする大穂孝子氏



献奏・斉唱「海ゆかば」トランペット 田櫓雅之氏 サキソフォーン 鈴木隆春氏

一つあり、宇内に無慮一百三十有余の
独立国家の新秩序の出現これなり。真
に世紀の偉業。この赫然たるに匹儔す
るもの果たして他にあらんや。

これ正に諸霊の志の顕現なり。諸霊
の血の発露なり。諸霊や、大仁にして

大徳、大勇にして大善なり。故に諸士
の霊徳や無量なり。諸士の光顔や巍巍
たり。諸士の威神や無極なり・嗚呼
尊い哉、嗚呼仰がんか哉、長存不滅の
光。南無特攻平和観世音菩薩・」と、
言を極め、心魂を傾注して奏上された。
真に特攻勇士は、護国の鬼神となって
散華され、今や平和守護の観世音菩薩
となつて我ら衆生を見守つておられる

のである。

この後、駒繫神社の澤田浩治宮司祭
主となつて神儀が執り行われ、修祓の
儀・降神の儀・献饌の儀・祝詞奏上・
玉串奉奠等の式典が、厳かな神楽舞曲
の流れの中、清らかに齋行された。

続く祭文奏上(祭文は後掲)の中で、
特攻平和観音奉賛会兼財団法人特攻隊
戦没者慰霊平和祈念協会の山本卓眞会
長は、現下の国内外の情勢に見る危惧
すべき状況に触れ、彼の大東亜戦争未
期、我が国の危急存亡の時に際し、こ
れを守護すべく、敢然、身を投じて散
華された英霊の崇高な行動に現れた、
日本人の魂の真髄を見つめ直し、日本

精神の作興を図るべく、全力を傾注す
ること、「特攻勇士之像」の護国神社
奉納運動等を通じて、英霊の慰霊顕彰
事業の更なる推進に努め、次世代へ継
承することを誓われた。

続いて来賓の熊本哲之世田谷区長が
挨拶に立ち、特攻勇士の尊い犠牲に
よつて戦後65年、我が国の平和と繁栄
があることを忘れず、平和宣言都市・
世田谷区民を代表して英霊に感謝の誠
を捧げると共に、平和と福祉のために
全力を尽くすことを誓われた。

次いで、献吟二曲が、一誠流・石橋
一歌氏の吟、逢坂龍信氏の笛で朗詠さ
れ、続いて世田谷コールエーデ合唱団

(指揮大穂孝子氏)による献歌「ふる
さとの四季」より秋二題の合唱が献奏
された。次いで世田谷区民吹奏楽団に
よるトランペット(田櫓雅之氏)とサ
キソフォーン(鈴木隆春氏)の献奏「海
ゆかば」があり、更にトランペットの
吹奏に合わせて、全員で「海ゆかば」
を斉唱した。その後、若く凛々しい陸
海軍衛兵隊によるラップ献奏と鎮魂の
儀礼が行われた後焼香の儀となった。

式典中、雨足は時折激しくなり、天
幕の中にも雨しぶきが降りかかる有様
となつたが、焼香の始まる頃には、不
思議と一時雨も上がり、会長・御遺族
を始め、参列者一同祭壇前に進んで焼



駒繫神社社殿

香、長い列ができたが、傘をさすこともなく全員無事焼香を終えることができた。正に英霊の御加護としか思えない現象であった。

その後、式衆一同退堂して池前に進み、池中に立ち給う観世音菩薩（夢違い観音）に向かって朗々と『般若波羅蜜多心経』の声明並びに神官による祝詞の奏上があつて、滞りなく第59回年次法要の幕を閉じ、引き続き、15時30分から約1時間、各テントに参列者相寄り、和やかに直会の杯を交わして歓談した。雨に打たれながらも、身も心も清められ、温められた一日であった。

(飯田正能記)



特攻勇士之像



池中の「夢違い観音像」



雨しぶさのかかる御遺族・御来賓席



陸軍衛兵隊



御遺族 焼香



ラッパ献奏・海軍衛兵隊



一般参列者 焼香の列

8月15日の靖國神社

大東亜戦争終結から65年目の8月15日、靖國神社には朝早くから、英霊を偲ぶ御遺族、戦友を始め、大勢の参詣者が、全国から続々と訪れた。

この日は、朝から強い夏の日差しが照りつけ、一点の曇もない晴天。気温は摂氏35度を超える猛暑日となった。にもかかわらず、炎天のもと参詣の人波は途絶えることがなかった。こんな時、何よりも有り難いのは、靖國神社崇敬奉賛会青年部「あさなぎ」の若者達の奉仕による冷たい麦茶の無料接待



8月15日朝の靖國神社

である。心の籠もった麦茶は、何よりも美味しい甘露の水と言うべきか。これまで長い間「英霊にこたえる会」の御高齢の戦友達の御奉仕によつていたが、3年前から、年若く志高き青年達に引き継がれたことは誠に喜ばしいことである。

更にこの日は、特に高齢者にとつては厳しい暑さのため体調を崩す者も多く、それらの人々の救護には、当協会の会員でもある成田日赤病院の看護師佐々木ひろ子さんを始めとする数名の看護師さん達が救護所に詰めて奉仕しておられたが、誠に有り難く、頼もしい限りであった。



8月15日正午の靖國神社社頭（黙禱）

靖國神社の発表によると、この日の社頭参拝者数は昨年を約1万人上回つて16万6千人を数え、団体・個人等昇殿参拝者数も4千3百人を超えたとのことである。

なお、この日、菅直人総理大臣以下閣僚は一人も参拝しなかったが、午前11時には、自民党・民主党の国会議員が加盟する「みんなで靖國神社に参拝する国会議員の会」（尾辻秀久会長）の衆参両院議員95名（代理を含む）が揃つて昇殿参拝をし、また、安倍晋三元首相、谷垣禎一自由民主党総裁、大島理森同党幹事長、石原慎太郎東京都知事、森田健作千葉県知事、小泉進次郎衆議院議員等もそれぞれ昇殿参拝をした。

この日午前9時から「英霊にこたえる会」主催の「第35回全国戦没者慰霊大祭」が拝殿で執り行われたほか、午前10時からは、およそ5百名が参加して恒例の放鳩式「日本の声―英霊に感謝する集い」が、境内の能楽堂前で開催され、京極宮司の発声により、参加者全員が「ありがとう」と御祭人への感謝の言葉を唱和し、放鳩者百名の胸に抱かれた「白鳩」が一斉に大空へと放たれた。

また、午前9時から斎行された英霊にこたえる会主催の「第35回全国戦没

者慰霊大祭」には、全国から参集した約6百名の参列者が拝殿に溢れ、折柄の猛暑と熱気により吹き出す汗も拭わずに、じっと正座して真剣に祝詞や祭文に耳を傾けていた。

中條高德会長は祭文の中で、昨年8月30日に実施された総選挙の結果、本会の進言にも耳を貸さず靖國神社をないがしろにした麻生総理率いる自由民主党は、記録的大敗を喫し、政権交代を余儀なくされた。その結果、生活第一を掲げ政権交代のみを唱和した民主党主体の政権が誕生し、総理に就任した鳩山由紀夫民主党代表は「靖國神社参拝は首相のみならず閣僚まで自粛させる」と表明し、後任の菅直人首相もまた「首相や閣僚の靖國神社参拝には問題がある。首相在任中は参拝するつもりはない」と明言した。

「かくばかり 醜き国になりたるか 捧げし人の ただに惜しまる」

この戦争未亡人の歌のとおり、我が国民に見られる最近の精神的荒廃は誠に遺憾な状況である。東京裁判史観の呪縛から脱却できず、大東亜戦争を侵略戦争であると是認するが如きは、独立国家の為政者としてあるまじき醜態と断言せざるを得ない。北方領土・竹島・尖閣諸島・拉致家族問題等をめぐる日本政府のこれまでの対応につい



放鳩式



青年部「あさなぎ」の麦茶接待所奉仕



看護師有志の救護所奉仕・左端 佐々木ひろ子さん

て、その腑甲斐無さに英霊のお怒りは如何ばかりかと忖度申し上げ、覚醒の天誅を下されんことを切に祈念申し上げる。我々は微力ながらも、同憂の士相集い、政権を利するための政党ではなく、真に国益、民福を念とする政党の現出を期待しつつ、「美しい日本、世界に誇れる国日本」の再生を目指して尽力していく、と誓われた。

次いで、佛所護念会教團合唱部による「同期の桜」「海ゆかば」「ふるさと」の献樂の後、参列者全員昇殿参拝をし、滞りなく大祭を終えた。

引き続き10時30分から、参道の特設テントにおいて、英霊にこたえる会と

日本会議の共催による「第24回戦没者追悼中央国民集会」が開催された。

この日の直前の8月10日、菅直人首相が「日韓併合百年」に関する首相談話を発表し、その中で、従前の内閣が踏襲してきた平成7年の村山謝罪談話の枠を超えて「政治的・軍事的背景の下、当時の韓国人々々は、その意に反して行われた植民地支配によって、国と文化を奪われ、民族の誇りを深く傷つけられました」と、具体的な侵害にまで言及し、偏った歴史認識を表明したことに對する反発、更には、去る7月7日、ロシア下院において、昭和20年9月2日、ミズリー艦上で日本が降

伏文書に署名した、その日を「対日戦勝記念日」に制定する法案を可決し、これにメドベージェフ大統領が署名したことに對する反発等で国民の怒りが噴出する中、集会は例年以上に緊張を孕んだものとなった。

集會では、始めに国歌斉唱、靖國神社拝礼、この程雑音を取り除き明瞭化された昭和20年8月15日の「終戦の証書」の玉音放送拝聴の後、炎天下約2千人の参會者を前に、三好達日本会議会長（元最高裁長官）及び中條高德英霊にこたえる会会長の挨拶があり、各界を代表して、漫画家のさかもと未明氏、当協会の理事でもあるジャーナ

リストの笹幸恵氏及びノンフィクション作家の関岡英之氏がそれぞれ提言を行った。

三好日本会議会長は、祖国と同胞を護るために一命を捧げられた戦没者を追悼し、慰霊し、顕彰することは、宗教、宗派、あるいは民族、国家を超えた人類普遍のものであり、国としても、同胞としても、子々孫々に至るまで、当然なすべきことである。本日も猛暑の中を多くの国民が靖國神社にお参りをし、戦没者を偲んでおられるのに、現内閣の閣僚は、菅総理を始めとして、一人も参拝をしないとすることは甚だ遺憾であり、靖國神社に對する非礼、無礼の振舞いであって、怒りを込めて強く抗議する。元来戦争による死は凄惨なものであるが、その死が凄惨であり、無念であればこそ、英霊の方々は誰よりも強く平和を願って亡くなられたに違いない、ここ靖國神社の目的も、平和を希求することにある、靖國神社の社憲（神社の根幹をなす定め）第二条に、その「目的」として、「本神社は、御創立の精神に基づき、万世にゆるぎなき太平の基を開き、以て安國の実現に寄与するを以て根幹の目的とする」と定めてある。これは明治天皇の御創立の大御心であると同時に、合祀されている英霊のお気持ちをも表し

無礼の振舞いであって、怒りを込めて強く抗議する。元来戦争による死は凄惨なものであるが、その死が凄惨であり、無念であればこそ、英霊の方々は誰よりも強く平和を願って亡くなられたに違いない、ここ靖國神社の目的も、平和を希求することにある、靖國神社の社憲（神社の根幹をなす定め）第二条に、その「目的」として、「本神社は、御創立の精神に基づき、万世にゆるぎなき太平の基を開き、以て安國の実現に寄与するを以て根幹の目的とする」と定めてある。これは明治天皇の御創立の大御心であると同時に、合祀されている英霊のお気持ちをも表し



第24回戦没者追悼中央国民集会・中條会長挨拶



提言者・さかもと未明氏



提言者・笹 幸恵氏



青年合唱団による英霊に捧げる唱歌合唱

ているものである。国民は誰しも平和を願っており、靖國神社もまた平和を願ひ、祈ることをその目的としているものである。しかし、その平和を護るためには、ただ「平和、平和」と唱えたり、憲法第九条護持をかたくに主張することによって得られるものではない、我が国の近隣は、そのようなお題目を唱えて安閑としておられるような国際情勢でないことは明らかである。我が国の平和を維持するためには、防衛のための必要な軍備を整え、的確な外交上の手段を講じることであるが、現政権は為政者としてその最大の責務を果たしていない。更にその歪んだ国家観、家族観を糾弾しなければならぬ。「日韓併合百年」に当たっての首肯相談話、その歴史認識の誤り、自虐的謝罪の繰り返し、また、永住外国人地方参政権付与の推進や選択的夫婦別姓制度の推進、新国立戦没者慰霊施設建設の推進問題等、すべてこの歪んだ国家観に発しているものであり、我々はあくまでもこれを阻止し、糾弾しなければならぬ。そして我々は、あるべき日本を目指して、地道に、真摯に、力強く国民運動を展開していかなければならない、と強調された。

中條英霊にこたえる会会長は、この会の初代会長は、最高裁長官を務められた石田和外氏、二代目は検事総長を務められた井本臺吉氏であった。この顔ぶれを見ても、当時、戦争に敗れたりといえども日本人は、英霊にお応えする気持ちが如何に強かったかということが分かる。しかるに、終戦65年の節目の年に、この国の総理大臣以下閣僚は、誰一人として靖國神社に参拝さえしない。その理由に「A級戦犯」が合祀されていることを挙げているが、これに対して、いわゆる東京裁判を始めとする連合国の軍事裁判で有罪とされ、処刑された方々も、昭和27年4月28日に平和条約が発効し、主権を回復すると共に、昭和28年8月の戦傷病者戦没者遺族等援護法の一部改正により、戦争犯罪裁判の被告人として刑死・獄死した人々の遺族にも戦没者遺族年金と弔慰金が支給されることとなり、恩給法についても昭和29年、30年と続いて法改正がなされ、刑死又は獄死した人々の遺族に対しても公務扶助料相当の扶助料が支給される等、国内法上、犯罪者ではないとされた。したがって、連合国の軍事法廷で一方的に裁かれたA級もB級もC級も、戦争犯罪者は国内法上犯罪者とは見做されないこととなった。その前提として「戦犯」釈放に関する4千万人の署名請願があり、国会で審議され、与野党挙げての全会

一致の可決によるものであった、と強調、反論された。

次いで各界代表の提言が行われたが、漫画家のさかもと未明氏は、今の日本は、本当に平和であると言えるのか、心が貧しく壊れてしまった国、地域社会が壊れてしまった国、この現状は、ひどい内戦状態ではないか、65年前、この国と民族を護るため尊い命を捧げてくださった英霊の方々は、果たしてこんな日本を作るために死んでゆ

かれたのであろうか、私達は本当に深い責任をもってこの国を建て直していかなければならない。この国は戦後焼野原から復興したが、それは戦後の民主主義の故ではなく、その復興を支えたのは戦前の教育を受けた人達であった。今この国はめっちゃめちゃになってい、子供達が何の夢も持てないでいる、それは戦後の教育のせいである。この国は、一度、経済第一の国を捨てた方がいい、これだけ立派なビルが建ち、ハード面は立派でも、日本人の心、ソフトの面はぼろぼろである、そんな国のままでいては、私達は英霊に対して申し訳が立たない、経済よりも大事なものがあ、家族同士寄り合うこと、弱い者を労るために一所懸命勉強するような、志を持った国民を育てるための教育を建て直すこと、もはや政治家

に任せてはおけない、私達が国民レベルで、私達の力で本当に心の芯のある国を作っていかなければならない。英霊が素晴らしい人達であったという敬意の念を、国民全員が持つようになるまで、共に頑張りましょう、と力強く提言した。

次に、当協会の理事でもあるジャーナリストの笹氏は、大東亜戦争の主として南方激戦地の慰霊訪問、調査活動の経験を踏まえて、マリアナ諸島、サイパン、ガダルカナルなど南方地域の慰霊碑が朽ち果てつつあり、遺骨収集も滞っている現状を訴え、また、若者に関心を持ってもらい、慰霊碑の維持管理費を捻出するため「戦史検定」を始めたことを紹介した。

また、ノンフィクション作家の関岡氏は、「日韓併合百年」の菅首相談話の批判と、韓国や中国によって日本が乗っ取られかねない外国人参政権付与の危険性を訴え、中国に擦り寄る財界を批判し、自分の国は自分で守る精神を憲法に明記し、国民精神を涵養すべきことを訴えた。

その後、正午より日本武道館からのラジオ中継で、政府式典での天皇陛下のお言葉を拝聴し、青年合唱団による英霊に捧げる唱歌合唱の後、声明文を朗読し、参加者の総意によって採択さ

れ、最後は全員で「海ゆかば」を斉唱して集会は終わった。(飯田正能記)

(追記)

35度を超える猛暑、終戦65年の節目の年、直前に出された日韓併合百周年記念の菅総理謝罪談話、靖國神社に代わる国立追悼施設の建設、全閣僚靖國神社不参拝宣言等々でいやが上にも熱く高揚した終戦記念日の8月15日、靖國神社での諸行事を終え、偕行社で一息ついた後、帰宅して何気なくテレビのスイッチを入れたところ、D8チャンネルの画面にいきなり根本博陸軍中将の写真が大きく出た。驚いてそのまま約1時間テレビの前に釘付けになった。その日の午後2時〜3時の間に放映されたフジテレビのノンフィクション「台湾に消えた父の秘密―歴史的瞬間」と題するドキュメンタリー番組である。

今春、集英社から出版された門田隆将著『この命、義に捧ぐ―台湾を救った陸軍中将根本博の奇跡―』という新刊書の内容に基づき、昨平成21年(09年)10月25日、台湾領・大金門島で開催された「古寧頭戦役六十周年記念式典」(注：台湾では、金門島戦を、その主戦場となつた大金門島西部半島の古寧頭村の名を取って「古寧頭戦役」と称している。)を中心に取材した番組である。その新刊書の宣伝を兼ねて予め企画された番組かも知れないが、これまで、台湾の置かれた国際的、社会的立場などを考慮してか、正史からは消されていた史実が、残された多くの資料や証言などから、当局者もマスコミなども改めて史実を見直さざるを得なくなったのかも知れない。いずれにしろ、これまで秘匿されていた金門島戦の実相を、資料と映像を通じて明らかにしてくれた好番組であった。

そこで、前記門田隆将著『この命、義に捧ぐ―台湾を救った陸軍中将根本博の奇跡―』と題する新刊本を、後ろの頁の「図書紹介」欄に掲載することにした。



テレビに映った馬 英九總統の演説

終戦の日に因んで

田中 賢一

終戦65年目の8月15日を迎えて、自身と御縁の深かった人々のことを思い起こしてみる。

私自身の1人

当時私は第一挺進戦車隊長で、我が隊は挺進集団の一部隊だったが、集団が比島に出るとき残されて、第一挺進団に配属された。本土決戦の期が近づき、我が隊（三個中隊と材料廠）は九州に配置された第五十七軍の指揮を受けることになり、都城の東にある三股村と中郷村に移駐した。

兵器を持って帰郷させたこと

8月15日の玉音放送は、上級司令部から指示がないので知らなかったが、ニュースでポツダム宣言受諾を知ったその日の正午頃だったと記憶するが、航空総軍から電報が入った。航空総軍から直接とはおかしいとは思ったが、通信隊が差し出す電文は「本州出身の下士官兵のうち定員の二割以内を〇〇を持って帰郷させよ」となっており、

〇〇のところが解けぬという。私は咄

嗟に思った。今から遊撃戦をやるのだ兵器を持って帰すのだと。中隊長を呼んで人選させ、その人達を都城の駅で激励して汽車に乗せた。

さて我々はこれからどうすべきか、本部付の原田大尉を自動車で川南にある挺進団司令部まで派遣した。川南まで4時間はかかる。原田が戻って言うのには、解けなかった〇〇は農具だ。戦に敗れ、軍隊はどこかで強制労働をさせられるかもしれない、そのとき国民の食糧危機に備えて、1割程の人員を帰郷させておくのだというのだが、兵器を持って帰したのは大変だ。司令部の偵察機を出すから小月まで飛び、門司で止める、という。

時間的に間に合わないの、私はその案を執らず、中隊長に命じ、先に帰した者と同郷の者を選し、命令の訂正を伝達させた。本件については、翌年米軍から取調べがあったり、検察局から呼出しがあったりして、尾を引くのだが、今回は省略する。

第五十七軍の戦闘停止命令

翌16日、鹿児島県財部に在る五十七軍に集合を命じられた。通信係の内藤中尉を伴い出頭した。師団は参謀長、直轄部隊は部隊長が参集した。軍司令官西原寛治中将が戦闘行動の停止を命

令し、米軍機が来ても射撃するなど付け加えられた。その時二百十二師団の高級参謀戸次中佐が突然立ち上がって

「そのようなことで国体が護持できますか」と大声で言った。軍司令官はその議論に巻き込まれまいと「今は方面軍から来た戦闘行動停止の命令を伝えておく」と言った。すると、戸次中佐は「我が師団は目下師団長が天皇陛下のところへ命令受領に行っておりますので、帰るまで軍司令官の言われることは聞けません」と言い放った。

二百十二師団長だった桜井徳太郎少将とは、戦後暫く経って面識を得たので、あの時はどうなさいましたか、とお尋ねした。すると、川南の挺進団司令部へ行き（桜井師団の司令部は隣の都農町に在った）、強引に軍債を出させて調布まで飛んだ。そこから市谷の陸軍省に行き、ポツダム宣言受諾は本当に大御心から発せられるのか確かめようとした。陸軍省に行き、部屋に入る前に廊下で東久邇宮殿下に出会い、

何しに来たかと問われたので、これこれしかじかと答えると、大層叱られ、早く帰れと言われた。これが桜井さんから聞いた話で、別の人の話によれば、終戦に当たり、一悶着起こしそうな師団長として、桜井徳太郎と片倉衷の二人が要注意だったという。

二人の村長

終戦から数日後のことだった。我が隊が駐留している三股と中郷の二つの村の村長が、揃って私の所に来た。

米軍が上陸して来ると婦女子を手籠めにするという噂が流れている。そのようなときに軍が護ってくれないならば、我々は自衛のため戦うので、今うち銃と弾薬をくれという申し出があった。私は「今は戦闘停止の命令は出たが、軍の組織はそのまま、このように駐留している。したがって、一存で武器を渡すことはできない」と言って断った。その時二人は顔を見合わせ、「コゲントキニセゴドンが生きチョツタラノウ」と言った。私は、大西郷に比較されたら随分見劣りがすると、我ながら思った。この辺りは宮崎県ではあるが、昔は薩摩藩の土地だった。

挺進神社後始末

やがて部隊の解散命令が出て、残置兵器の監視に一部を残し、部隊は復員した。私と残務整理のための将校1名は第六航空軍司令部付となつて、11月まで残った。ただし勤務場所は川南に在る第一挺進団司令部である。我が戦車隊が都城平地に移る前にいた所だ。

毎日顔を会わすのは挺進団長中村大佐、挺進第二聯隊長大崎中佐、それに私である。第一聯隊は関東地区にいてここにはいない。我々が一番先に考えたのは、管内にある挺進神社をどうするかということだった。ここには挺進部隊の全戦没者が祀つてある。出来れば今後、この辺りに居住する者がお護り出来ればよいと思つた。折しも宮崎市で戦災に遭つた宮崎師範男子部が、空き兵舎を使うことになった。男子部長さん（名前は失念した）が、挺進神社は我々がお護りします。生徒の精神教育にも使います、と言うので、有り難いことだとお任せした。

ところが翌年の春頃、宮崎市に在る米軍が突然現れ、学校に神社があると怪しからんと、有無を言わせず焼き払つてしまった。この話には後日談があるが、終戦直後のことではないので割愛する。

御縁の深い人達の終戦

三股村にいた時、航空総軍から烈作戦のため指揮官と自動車操縦手24名の差出しを命じてきた。烈作戦とはクー8クライダーに25ミリ機関砲搭載の四輪駆動自動車を載せ、沖繩の敵飛行場へ着陸し、焼夷実包で在地の敵機を撃つて廻るといふ作戦だと説明があつ

た。機関砲の射手は挺進第二聯隊から出すという。クライダーを使うのだから滑空飛行聯隊長の古林少佐の意見は聞いただろうが、私には何の相談もなかった。四輪駆動自動車には路外性は殆どない。航空総軍の参謀の思い付きでこのような作戦を計画するとは憤慨したが、命ぜられた以上人員は出さねばならぬ話すと、自分を出してくれと言う。この人は日常の訓練で、私が戦車に熱心で、自動車中隊には余り関心が無いと思つて居るのか、戦闘になれば爆薬を抱いて敵戦車の下に飛び込むと言ひ、肉薄攻撃の訓練をいつもやっていた。それに東京の大空襲で母親と弟を失つて居るので、闘志に満ち溢れており、早速編成表を作つてきた。

7月の下旬だったと記憶する。この人達を川南の挺進団まで送つて別れた。いつ決行なのか、発進飛行場は新田原と聞いたので、その時は見送りに行くつもりでいたが、終戦になってしまった。福生に居たはずだと思ひ、連絡を取つてみたが、返事がない。広田の生家は東京の本所、勿論戦災で家はない。三股に移る前に妻子を帰し、山梨に疎開したと聞いていたが、住所は聞いていかなかった。いつも気掛かり

だったが、そのまま打ち過ぎていた。昭和25年頃だったと記憶するが、下総中山の駅通りで駄菓子露店商をやつて居る広田を見掛けた。その時は立ち話だったが、終戦時どうしたか尋ねたところ、航空軍の参謀が来て、このピラを配れと言われ、飛行機に乗つて散布した。それには終戦反対と書いてあつた、という。

終戦時挺進各部隊の状況

挺進部隊の大半は外地に在つた。私は川南の第一挺進団司令部に移つてから11月までの間、出来るだけ情報を集めた。私は第一回の出動司令部の部員だったが、復員後昭和19年12月挺進戦車隊長になるまで、挺進練習部の幕僚として新設部隊の編成に携わり、戦地に送り出したりして居たので、特にその感が深かつた。また、川南に在る第一挺進団長の中村大佐も、戦地から帰るであろう復員者の面倒を見ることに、道義的責任があると強く思つていたので、一緒になつて情報収集に勤めた。

以下述べるのがすべて川南に在る間に承知したわけではない。その後判明したことも含めて述べる。

挺進集団主力（滑空機搭乗部隊）

ルソン島建武集団の中核としてクラーク西方高地を占領して戦つたが、敗れてピナツボ山麓に集団長塚田中将以下約百名が残存して居た。

挺進第三聯隊のレイテに降下した部隊生存者なし。

挺進第四聯隊のレイテに降下した部隊軍司令部の護衛としてセブに渡つた者の中に若干の生存者があつた。

第二挺身集団のルソンに残つた者

挺進団長徳永大佐以下バレット時で戦い敗れ、北部ルソンのピナバガン付近で終戦を迎えた。途中で挺進飛行戦隊の地上勤務者を加え、全部で約百名。

挺進飛行団

北鮮咸興で戦力回復中終戦となつたが、その前に烈作戦のため、一部の滑空部隊を福生に出して居た。

世界が驚倒した特攻隊の出現と感動
—日本人よりも深く洞察し共感を寄せる外国人—

「編注・本篇は、高貴な日本精神の発露、発信者と讃えられる元高千穂商科大学教授故名越二荒之助先生が編集主幹兼執筆者となり、多くの志高き執筆者(12名)が協力して出版された『世界から見た大東亜戦争』(展転社)平成3年12月8日初版発行)の中の「第2部大東亜戦争のクライマックス」の第五に掲載されている渡辺徹二氏(日本国体学会研究員、月刊『立正』編集長)の編著になるもので、その中から、抜粋して紹介するものである。ここに紹介するのは、外国人が日本の特攻隊について、その真相を解き明かすために綴った本からの記述である。なお、一部、名越先生著『史実が語る日本の魂』から補足した。」

体当たり攻撃を敢行し、大損害を与えたことを報じた。ニュースの解説者たちは、これらの攻撃が秩序立てて実行されたもののように見えるところから、これが日本軍司令官の命令に発したものであるということを力説した。この時をもって、太平洋戦争の局面は全く異常な展開を見せることになったのである。この日以降、それは世界戦史のいかなる戦闘にも似つかぬものと化した。」(フランスのジャーナリスト、ベルナル・ミロー著『神風』、内藤一郎訳、昭和47、早川書房)(注：この日の午前7時25分、フィリピンのマバラカット基地を飛び立った1番機・関行男海軍大尉を隊長とする「神風特別攻撃隊敷島隊」(2番機・中野磐雄一等飛行兵曹、3番機・谷暢夫一等飛行兵曹、4番機・永峰肇飛行兵長、5番機・大黒繁男上等飛行兵は、世界初の編隊による組織的な体当たり攻撃を行った。それまでも日本だけでなく、アメリカでも体当たり攻撃が行われたことはあったが、それまでの体当たり攻撃は、被弾して戦闘不能になった場合など、個人の判断で、敵艦若しくは敵機に体当たりしたもので、出撃の時点では生還を期していたが、この特別攻撃隊は、出撃の前から生還を全く考えず、爆弾を抱いて敵艦に体当たり

り攻撃を敢行し、敵艦を戦闘不能にすることを目的とした、全員必死の特攻であった。この神風特別攻撃隊の出現が、米軍に与えた衝撃は重大なもので、特攻機が狙った目標を指して冷静に、かつ事前に立てた計画に従って急降下する光景は、対空砲の砲員たちの決心に衝撃を与え、太平洋戦線の連合軍部隊の間にパニック状態に近いものを引き起こさせた。

その様子は、次のレイ・ターバック米海軍大佐の同年10月25日付けの日記からも窺える。

●「この戦闘で見られた新奇なものは、自殺的急降下攻撃である。敵が明日撃墜されるはずの航空機一〇〇機を保有している場合、敵はそれらの航空機を艦船一〇〇隻を炎上させるかもしれない。対策が早急に講じられなければならない。我が軍が兵員揚陸艦(APA)や貨物揚陸艦(AKA)に代えて、より多くの輸送駆逐艦(AFD)や装甲揚陸艦(LSM)及び補給貨物を搭載した戦車揚陸艦(LST)を使用するようにしない限り、将来、上陸作戦を実施する場合、敵の自殺的急降下攻撃はAPAやAKAにとって致命傷となるように思われる。」(デニス・ウオーナ、ペギーウオーナ、妹尾作太男共著、妹尾作太男訳『ドキュメント神風』、平成元、徳間書店)

また、当時、米第七十八機動部隊の北方部隊指揮官バーベイ提督は次のように報告している。

●「護衛空母とのこの戦闘で、敵は僅かばかりの、てんでんばらばらの特攻機をもって、このような大戦果を挙げたので、敵はこの目的のために、相当規模の狂信的グループを訓練し編成するものと思われる。(中略)特攻機による攻撃は大型輸送船と護衛空母に対して、特に有効である。航空直衛隊の能力が最も減殺される月夜、黎明あるいは薄暮時、特攻機との戦闘は困難である。敵の陸上機の航続距離内で作戦を実施する場合、我が方がこれら自殺的攻撃能力を割り引いて考えるべきだとは、小官は思わないし、また、明け方、輸送船に対してこの種の攻撃が依然として敢行された場合には、上陸作戦が挫折させられることになるかもしれないと考えている。」(『ドキュメント神風』)

そしてまた、ハルゼー提督は、この日本の特攻について、次のように述べている。

●「計画的自殺攻撃の背後に潜んでいる心理は、我々にとって余りにも受け入れ難いものである。生きるために戦

●「すべては一九四四年(注・昭和19年)一〇月二五日に始まった。いや、より正確に言うなら、全世界はこの日驚くべきニュースに接したのである。新聞とラジオは、日本軍の飛行機がレイテ沖でアメリカ海軍艦船に決然たる

うアメリカ人にとって、他国の国民が死ぬために戦うという事実を認識することは困難である。日本軍が彼らの腹切りの伝統のために、そのような特攻隊を真に効果的ならしめる志願者を集めることができるだろうかとは、我々には信ずることができなかつた。翌日、神風特攻機がダビソン機動部隊の空母「エンタープライズ」はミスしたが、同部隊の二隻の空母「フランクリン」と「ペロウウッド」に命中したとき、我々はガンと殴られたように感じて、迷夢から覚めた。」(『ドキュメント神風』)

この命を懸けての特攻は、日本人だけでなく、多くの外国人にも感動を与えた。以下にその例を挙げると、まずビルマの元首相バー・モウは、その著『ビルマの夜明け』(横堀洋一訳、昭和48、太陽出版)の中に書かれている昭和19年11月6日、日比谷公会堂における大衆集会での演説で、次のように述べている。

●「ここで、我々の最終的勝利を確信している私の第三の理由を挙げよう。それは、全世界を驚かせたあるもの、我々の東アジア革命の基本的精神と意義とを示しているもの、すなわち、神風の精神である。それは、新しい東アジアの真の基礎となりつつあり、いか

なる敵も撃ち破ることのできない甲冑で武装された自己犠牲の精神、生か死かの精神、勝利のために死をいとわぬ精神である。私は台湾とフィリピンでの神風の偉業を読んだ時ほど、心を動かされたことはかつてなかつた。その時私は、神風の精神が減じない限り、東アジアも決して滅びない、と自らに語つた。」

フィリピンの元上院議員ベニグノ・アキノ氏(コラソン・アキノ元大統領の御夫君で、1983年(昭和58年)に暗殺された。)も、次のように感慨を込めて、特攻隊員への思いを語っている。

●「人が自分を越えた何ものかのために、命を犠牲にするのは、いつの時代でも美しい。マバラカットから出撃した彼らに共感を抱いた」(平成3年6月25日付け「朝日新聞」夕刊「窓—論説委員室から」)

特攻精神に感動したのはアジア人だけでなく、先に紹介したフランス人のベルナル・ミローも自著『神風』の中で、次のように述べている。

●「このことをしも(注・国家への殉死、肉弾攻撃のこと)、我々西欧人は笑つたり、哀れんだりしていいものだろうか。むしろそれは、偉大な純粋性の発露ではなからうか。日本国民はそ

れをあえて実行したことによって、人生の真の意義、その重大な意義を人間界で最後の国民となつたと著者は考える。確かに我々西欧人は、戦術的自殺行動などという観念を認容することができない。しかしまた、日本のこれらの特攻志願者の人間に、無感動のままであることも到底できないのである。彼らは、人間というものがある、はつきり得ることの可能なことを、はつきりと我々に示してくれているのである。」

また、同じくフランスの思想家モーリス・パンゲも、その著『自死の日本史』(竹内信夫訳、昭和61、筑摩書房)の中で、次のように述べている。

●「生きてることが美しかるべき年頃に、立派に死ぬことに、これらの若者たちは皆、心を用いた。そのため彼らは人に誤解された。彼らに相応しい賞賛と共感を彼らに与えようではないか。彼らは確かに日本のために死んだ。だが彼らを理解するのに、日本人である必要はない。死を背負つた人間であるだけでよい。」

◇ ◇ ◇
更に、この「神風特別攻撃隊」とは違ふが、その行動と精神において同じと言える、特殊潜航艇による攻撃に関

して、次のような感銘深い話題が残されている。

潜水艦に搭載された特殊潜航艇は、昭和17年5月31日、オーストリアのシドニー軍港とマダガスカル島のデイエゴ・スアレズ英軍港を同時に奇襲攻撃したが、そのうちシドニー軍港を攻撃した3隻の特殊潜航艇のうち、1番目に発進した中馬兼四海軍大尉と大森猛一等兵曹の艇は、防潜網に引っ掛かつて壮絶な自爆を遂げ、2番目に発進した伴勝久中尉と声辺守一等兵曹の艇は、湾内深く潜入し、軍艦クタブルを撃沈したが、砲撃で受けた損傷のため脱出できず、タスマン海に沈んだ。最後に発進した松尾敬宇大尉と都竹正雄二等兵曹の艇は、敵艦シカゴに肉薄したが、岸壁に衝突して故障し、魚雷発射も体当たりも不能となり、二人は拳銃で頭を打ち抜いて自決した。

ところが、オーストリア海軍は、湾内で沈没した2隻を引き揚げ、6月9日に4人の日本海軍軍人の勇氣に敬意を表し、海軍葬の礼をもって弔つた。当時、オートルリア国内では日本と交戦中ということもあって対日感情が悪く、「我々の同胞を殺した敵兵を何故それほどまでに遇するのか」と反対論もあつた中で、この海軍葬を命じたシドニー地区海軍司令官のムーアヘッ

ド・グールド少将はラジオを通じ、毅然として次のように国民に訴え、また弔辞で日本兵の勇気を讃えた。

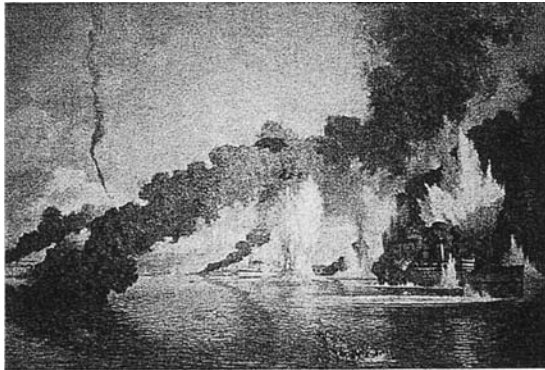
●「日本から一万キロ離れたシドニー軍港に対して、このような鉄の棺桶で出撃するためには、最高度の勇気が必要であるに違いない。・・・これらの人達は最高に愛国者であった。我々のうちの幾人が、これらの人達が払った犠牲の千分の一のそれを払う覚悟をしているだろうか。」・・・このような勇気は、一民族のものではない、全人類のものである。オーストラリアの青年諸君よ、日本軍人の千分の一の愛国心を持って、国のために尽くしてもらいたい。」〔特殊潜航艇戦史〕ペギー・ウォーナー、妹尾作太男共著、妹尾作太男訳、昭和60、時事通信社〕

その時の海軍葬の様子は、国営ラジオ放送で全国に中継されたし、新聞も詳しく報道した。その時の録音テープは現在、靖國神社の遊就館にある。葬儀終了後、四人の遺体は茶毘に付して河相達夫公使に託され、10月9日、横浜港に喪の凱旋をしたのである。

特殊潜航艇は、その後永久保存の措置が取られ、キャンベラの戦争記念館とシドニーに安置されている。毎年5月になるとマスコミは、「深海からの勇者たち」という特集を組み、昭和60

年には、トニー・ウィラー監督によって映画化された、という。(名越二荒之助著『史実が語る日本の魂』より)

一方、マダガスカル島のディエゴ・スアレズ英軍港を奇襲した2隻の特殊潜航艇のうち、1艇には秋枝三郎海軍



キャンベラの戦争記念館に掲げられた「シドニー海戦」



シドニー海軍葬における弔銃発射の様子



中馬兼四大尉(上段左)、大森猛一等兵曹(上段右)、松尾敬宇大尉(中段左)、都竹正雄二等兵曹(中段右)、伴勝久中尉(下段左)、芦辺守一等兵曹(下段右)

大尉と竹本正己一等兵曹が乗り込み、もう1艇には、岩瀬勝輔少尉と高田高三二等兵曹が乗っていた。その時の戦果は目覚ましく、軍港内の戦艦ラミリーズ号(29150トン)を大破させ、タンカー1隻ブリティッシュ・ロイヤリティイ(6993トン)を撃沈した。どちらの艇が成功したかは確認できないが、1艇は港外に脱出の途中、珊瑚礁に引つ掛かり、座礁してしまつた。二人の乗組員は艇から抜け出し、上陸して陸路をモザンビークに向かつて走つた。3昼夜かかって6月3日、目指す地点が見えるベエタエタという丘に辿り着いたが、既に約束の時間が過ぎていて母艦は見えず、英軍のパトリール隊に発見されて戦闘となつた。ロンドンのBBC(英国放送協会)は6月6日の放送で次のように報じている。

「6月1日の朝、ディエゴ・スアレズの基地内に日本軍人二人が抜刀して斬り込んできた。英軍は包囲して「武器を捨てよ、抵抗はむなし」と呼び掛けたが聞き入れなかつたので、やむなく射殺した。我が軍の死傷者は6名であつた」と。

当時英国の首相であつたチャーチルは戦後、『第二次大戦』と題する全6巻の大作をもつてノーベル文学賞を

受賞したが、その第4巻には「日本の猛攻」と題してマダガスカル攻撃について書いている。それは、チャーチル首相から外相に通知する形で、日付けは1942年6月2日となっている。その概要は「日本の潜水艦は、ディエゴ・スアレズ港の至近距離まで接近すると、小型潜水艇を発進させた。軍港内に潜入すると、戦艦ラミリーズと近くのタンカーに魚雷を打ち込んだ。その後、乗組員は潜水艇を離れて上陸し、攻撃してきた。イギリスのパトロール隊は、直ちに射殺した」そして、「二人の日本海軍軍人は祖国のために献身し、類稀なる功績をたてた」と結んでいる。これは、日本海軍省の公表とBBC放送とほぼ同じであるから、軍港を攻撃した2艇のうち、1艇の乗組員二人は上陸して陸路を3日間走って6月3日にベエタエタまで行って、そこで戦死し、もう1艇は攻撃が終わると浮上してディエゴ・スアレズの基地内に抜刀して斬り込み、そこで戦死した。したがって乗組員4名とも最後まで戦って戦死したことになる。

このチャーチルの大著は、昭和27年に毎日新聞が翻訳して『第二次大戦回顧録』全24巻として売り出したが、このマダガスカル巻で、チャーチルが日本軍人の活躍を讃えている部分は、

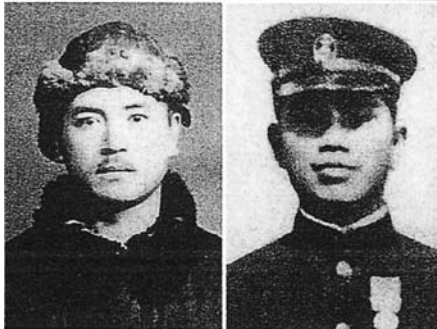
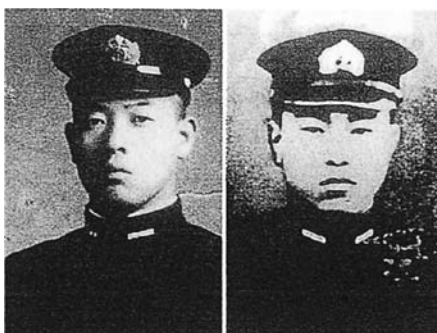
何故か削除されている。(名越二荒之助著『史実が語る日本の魂』より)



平成9年5月31日、ディエゴ・スアレズ軍港の見える丘で、新しくなった慰霊碑の除幕式が行われ、マダガスカル軍および官民多数が出席した



掲げられた旗は、左からマダガスカル共和国旗、日本国旗、日本帝国海軍旗



秋枝三郎大尉 (左上)、竹本正己一等兵曹 (左下)、岩瀬勝輔少尉 (右上)、高田高三二等兵曹 (右下)

◇ ◇ ◇
《特攻精神を高く評価し、後世に伝える外国人の人々》

戦後の日本人がほとんど顧みてこなかった特攻隊の精神的背景への探究を外国人が熱心に行っていることには、深い感銘を受ける。そこには深い洞察と共に、賞賛と共感がある。それらを以下に二、三紹介する。

アメリカ人のアイヴァン・モリスは自著『高貴なる敗北』(斎藤和明訳、昭和56、中央公論社)の中で、次のように述べている。

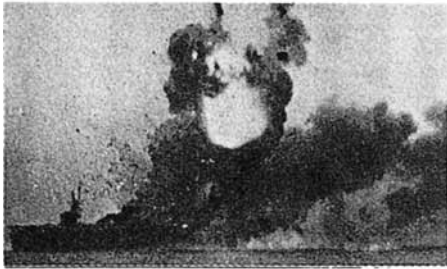
●「彼らはまず、自己の出生の地日本に対して恩を抱いた。また、独特の国体とその美德とを体現する天皇に対する恩を感じていた。自殺攻撃についての描写は、どれを見ても、搭乗員の最後の言葉が天皇に向けられていたことを語り伝えている。たとえ個性の輝きに乏しく思えようとも、天皇とは日本という国家、家系の最高位を占める祖父像になっていたのである」

また、フランス人のベルナル・ミローは、自著の『神風』の中で、次のように述べている。

●「日本の兵士たちは、かなりのインテリの者たちさえも、なお皇国の不滅不滅を信じていたということは、驚く



英国人デビット・ブラウンは特攻隊員を Fighting Elites (ファイティング・エリート) と自著『KAMIKAZE』で讃え、たくさんの写真を使いながら、特攻隊出現の経過と戦果を紹介し、その悲壮美に迫っている(カバー写真は人間爆弾「桜花」の正規搭乗員)



昭和19年10月25日、最初の神風特攻隊の敷島隊1番機・関行男大尉はレイテ近海にて米空母セントローに突撃、約20分後に撃沈させた。「世界最初の正式人間爆弾」だった。(写真はその瞬間『KAMIKAZE』より)

べきことだが、事実なのである。そして、ほとんど絶対多数の者が、死ぬまで戦わされることを納得していたのであった。信じ難いことと思われようが、このことは兵士たちの無知ゆえによるものではなかった。むしろその反対に、彼らは大真面目によく考えていたのである。(中略)

実際にこれらの兵器で、戦果を上げ得る前に、あえなく散華した多くの純粹な日本の若者たちには、彼らの驚嘆すべき祖国愛の高揚と、その比類ない勇気のゆえに、一層痛ましく、誠に胸えぐられる悲痛さを禁じ得ないものがある。

しかし、これらの武器が我々の目には如何に悪魔的と映り、それによってあたかも命を捨てた若者たちの冷たい勇気と決意の程が、如何に我々を畏怖せしめようとも、それでもなおかつ、これら日本の若者たちは、言葉の最も高貴な意味において英雄であり、未来永劫英雄として、我々の心中に存在し続けることは間違いない。」

同じくフランスの思想家モーリス・パンゲは、自著『自死の日本史』の中で、次のように述べている。

●「殺戮のために選ばれた犠牲者たちは、と読者諸賢は言うだろう。だがそれは違う。彼らが自分たちの運命を受け入れる、その受人れ方を見ないのは、彼らを不当に貶めることになるだろう。彼らは強制され、誘惑され、洗脳されたのでもなかった。彼らの自由は

少しも損なわれてはいない。彼らは国が死に瀕しているのを見、そして心を決めたのだ。この死はなるほど国家の手で組織されたものではあったが、かもしそれを選んだのは彼らであり、選んだ以上、彼らは日一日とその死を意識し、それを誇りとし、そこに結局は自分の生のすべての意味を見出し続けるのだ。」

また、イギリス国防省のデビット・ブラウンは、次のように述べている。●「神風という自殺作戦の源は、日本の自己犠牲の戦士の法典である武士道と、日本の国家宗教である神道にあり、主戦場において次から次に繰り返された。」(『Fighting Elites KAMIKAZE』DAVID BROWN, Bison Books Ltd

London, 1990)

更に、イギリス人のリチャード・オネールは、次のように述べている。

●「日本人が神風を始めとする特攻隊に参加したのは、国体を護持するため、一身を犠牲にしても良いとの考えから発したものであり、彼らを勇気付けたものは、日本の武士道の伝統であった。国民のすべての人々に、一身を犠牲にする武士道の精神を持つよう呼び掛けることができたのは、日本だけであつたらう。このことは、第二次大戦の末期における、日本の特攻作戦による勇猛な反撃を生み、また、敗戦に際しては、民族的な誇りを失うことなく、また、戦後の日本の偉大なる復興の原動力となった、と筆者は信じているのである。」(リチャード・オネール著『特別攻撃隊』、益田義雄訳、昭和63、霞出版社)

(飯田正能記)

講演録

「世界の未来を開いた昭和時代」

千葉大学名誉教授 清水 馨八郎

「編注・本稿は、平成22年5月日本会議川崎北支部において行われた千葉大学清水馨八郎名誉教授の講演録を、「英霊の志を継承する会」(宇井豊会長・陸士59期)の会報『八紘一宇』第2号(平成22年6月15日発行)に掲載されたものですが、同会のご了承を得て転載させていただきます。」

●東京裁判史観と司馬史観

今日はお招きいただいてありがとうございます。ありがとうございました。私は、今、昭和神宮を建てようという運動を起しています。心強い協力者のお一人として、宇井先生からは常に運動への御指示をいただいております。本日の講演テーマは「世界の未来を開いた昭和時代」という題ですが、これも私が作ったものではなくて、宇井先生からいただいたものです。徹底的に話せば2時間も3時間もかかりますけれども、まずは今までの東京裁判史観がいかに誤りであるかということ、皆さんに聞いていただきたいと思えます。

昭和という時代は、世界史的に見ても、明治よりもはるかに重大な意味を持つ時代です。なにしろ世界が解放されて植民地がすっかりなくなり、肌の色で人を区別することが全くなくなつた。これがみんな日本の力なんです。しかし、世界はそれを知っているのに、当の日本人だけは知らないでいる。まだ、日本は侵略戦争をした悪い国だと思っているんです。とんでもないことです。そういう意味で、日本に深く根付いた東京裁判史観を糺す努力を、私たちは続けていかななくてはなりません。

ちなみに、いまNHKでは、スペシャルドラマと銘打って『坂の上の雲』を、大河ドラマとして『龍馬伝』という番組を流しています。皆、感動しながら見ているようですけれども、実はほとんどが嘘というより、おもしろくするためのフィクションです。

どういふことかという、これは皆、司馬遼太郎が書いた物語にすぎないんです。研究者の批判や検証を経た歴史的事実ではないのです。私は歴史学者ですが、坂本龍馬なんていう人は歴史の記録上にはほとんど出てこない。つまり、坂本龍馬のキャラクターは司馬がでっち上げているんです。

ところで、日本の歴史上で最大の英

雄キャラクターといえは、日本武尊(ヤマトタケルノミコト)です。彼は天皇の皇子として東西を転戦して敵を討ち、日本を開いたとされています。この事業は、一人の人間には到底不可能なスケールです。ここで考えるべきは、当時、日本の国作り燃える熱血な青年や少年たちは、日本中にたくさんいたはずだということです。彼らの努力や功績は、その名前とともに長く後世に伝えられるべきものでしたが、『古事記』は一つ一つを記録するのではなく、日本武尊という人物の偉業に集約して、それを歴史として子孫に伝えたのです。つまり、当時の青年たちはみんな日本武尊であり、日本武尊という名前を使ってその足跡を歴史に残したんです。これは、子孫にとっては大変分かります。それと同じように、幕末から明治維新を迎えるまでの間、日本中の青年たちがみんな同じ気持ちを持っていました。「このままでは大変だ、日本が滅ぼされてしまう」という危機感があった、「では、自分にできること、やるべきことはなんだ?」という問題意識を生み、たくさんの方々が覚悟を決めて実際の行動に出ました。坂本龍馬は土佐の人間ですが、このとき土佐藩の勤皇党は何十人もいたんです。決

して坂本龍馬だけが熱かったわけではありません。それではなぜ、司馬遼太郎は坂本龍馬だけを取り上げたのか?坂本龍馬は一八六二年三月、二十六歳で脱藩し、五年後長崎から船に乗って自分の故郷へ向かうのですが、途中の船の中で、日本がとるべき八項目の指針「船中八策」を書きました。そして、土佐勤皇党の人間が歴史に残したものはこれだけだったのです。坂本龍馬は相当のことをやって日本をひっくり返したんだと思われていますけれども、一人や二人があんなことをできるはずがない。つまり、歴史に名を残さずに死んでいった土佐の青年たちの功績を一人の人間に集約することで、坂本龍馬というスーパーマンが生み出されたというわけです。龍馬は三十歳で死ぬので、脱藩後二三年の出来事で、江戸や鹿児島、長崎を飛び回って、大事業をやったというが、当時は飛行機も新幹線もなく、すべて徒歩で江戸へ出るのに一月はかかることを忘れてはなりません。

こうした坂本龍馬の創出は、司馬遼太郎の歴史観にとっては必然の要請でした。司馬遼太郎の見方はどこが間違っているかというと、彼は幕末の時代は偉大だった、明治の時代は偉大だったと明るく褒め讃えながら、それ

に続く昭和をとんでもない暗黒の時代だと徹底してこき下ろします。ここでは、幕末や明治を生きた日本人の偉大さは坂本龍馬のように可能な限り強調されます。また、日露戦争を舞台に、東郷平八郎の参謀たちが活躍する『坂の上の雲』についても同様で、詳細な描写は確かにリアリティを感じさせますが、あくまでも小説家司馬遼太郎のペンの力がおもしろく創り出した明治の世界です。そして対照的に、国家や国民の連続性を平気で無視して昭和の日本と日本人を矮小化してしまうのです。

司馬の発想をこのように見ていくと、まさしく、昭和を徹底的に解体した東京裁判史観そのものと言えます。現在でも東京裁判史観にみんな引掛かったまま、騙され続けているわけですが、昭和の時代を正当に再評価すると言う確固たる姿勢がなければ、司馬と同じく幕末明治に逃げ込むだけに終わってしまうでしょう。むしろ、私なら『坂の上の雲』の上の太陽、昭和を讃えます。

司馬史観は、東京裁判史観と相互に支え合いながら、戦後も長らく学者や文化人たちの間で広く共有されてきました。ところが、去る平成二十年、彼らの誤りが明白に露呈される場面がありました。今上陛下の御即位二十年を

お祝い申し上げようという機運が大いに盛り上がったのです。このとき、もちろん私も日本国民の一人として関心はありました。しかし、それ以上に私は違和感を覚えたのです。十一歳の皇太子として敗戦を経験されて以来、戦争には負けても人類を解放した昭和天皇様の偉大さを、四十年余にわたって見続けてこられたのが今上陛下です。だからこそ、今上陛下は御即位からの二十年、昭和天皇様が道筋を立てられた戦後の自由と平和を実直に引き継ぎ、守ってこられたのです。

今上陛下の二十年を讃えるならば、それ以上に昭和天皇様の戦後四十年に思いを馳せるべきではないでしょうか。昭和を否定する先には現在も未来もあり得ないのです。

あの昭和の戦争、私は海軍に行きました。宇井先生は陸軍でした。そうやって六百万の人が死没しました。三百万の兵隊さん、それから、国内にあった人も原爆や空襲で三百万の人が死没しています。その六百万人の日本人が死んだおかげで、人類が解放されたんです。人類の歴史の中で、これほど偉大な時代があるでしょうか。それなのに、

司馬史観のように昭和はとんでもない暗い時代だと頭に染み付いている人が大変多い。例えば、ノーベル物理学賞

をもらった益川敏英さんもそうです。式典でのスピーチを「日本がとんでもない戦争をやっちゃった」から始めていました。ノーベル文学賞をもらった大江健三郎は更に重症で、日本が悪かったと語るだけでなく、自分たちの友達（同盟国）が悪いことをした、などとお節なことまで発言していました。国を代表するノーベル賞クラスの頭脳ですらGHQにすっかり騙されている始末ですから、私は日本人として憤懣やるかたない思いです。

今の六十歳代の人間のほとんどは、かつて小学校時代に日教組の教えを毎日徹底的に教えられています。日教組の大方針は、東京裁判史観の下で日本の青少年が歴史を学ばずほど日本を嫌うように教えることです。日本は悪い国だ、日本人は罪を背負った不幸な国に生まれてしまったんだと刷り込むわけです。世界のどこを探したらそんな国があるでしょうか。

奇しくも、鳩山内閣は揃いも揃ってみんな六十歳代で、こうした教育体験から脱却できないままに権力の座にいた人間ばかりです。日本の国は悪い国だから潰してしまえ、と彼らが考えるのは自然な流れなのです。鳩山総理なんて、少し目を離せば、その隙に日本の国を中国へ平気で差し出してしま

う。名前が「中国ユキオ」ですから(笑)。弟の邦夫さんの方は日本の国を(クニオ)しっかりと背負っているのに、鳩山兄弟はまるで水と油です(笑)。

特に、鳩山内閣が進めようとしている日本破壊活動の顕著な例として挙げられるのは、外国人参政権問題でしょう。定住外国人に地方参政権を与えることになれば、最も恩恵を受けるのは、六十万人の在日コリアンと、急増一方の中国人です。近年、一般朝鮮人の帰化者数は増えているようですが、朝鮮総連や民団へ忠誠心の厚い活動家たちは、長年日本に暮らして日本人の生活様式にいくらか慣れようとも、決して帰化して日本人にはなりません。朝鮮人のまま日本で暮らし、日本人と同じ権利を求めていくのが彼らの生き方なのです。加えて、在日韓国人に参政権を与えろと叫んでいる政治家の面々を見れば、この問題が日本の国家利益を考えたものではないことは明らかです。

もう一つ、民主党が熱心に推進している夫婦別姓制度。これが始まれば日本の家族制度は根底から崩壊します。そもそも日本の力は家族制度の中にあるんです。日本で言うところの「国家」とは、国と家という字で表現されているように、家と不可分の関係にあります。これに対して、例えば、英語では

国家を表すのにステートやネーションという言葉を使います。家などという概念は全く出てきません。欧米において国家とは、一人の人間の個、個人の個が集まって出来たものと考えられているからです。その点、我々だけは家を最小の単位としており、無数の家が集まって出来ているから、国家という表現になるのです。このように、先祖から代々伝わっている家という枠組みが日本を作っており、社会の安定や発展に対して大きな力を発揮しているのです。つまり、もしも仮に夫婦別姓を推進した場合、日本の国家や社会システムに対して大きなマイナス影響を及ぼすことでしょうか。そういうとんでもないことを民主党はやろうとしているのです。本当にこのままでいったら、日本は滅ぼされてしまいますよ。

●西洋文明批判

東京裁判史観(司馬史観)では、大日本帝国の足跡は、凶暴な侵略戦争の歴史として断罪されています。しかし、私は世界の地理や歴史を勉強していますが、大日本帝国を裁いた白人たちこそ残虐で無道この上ない、とんでもない民族と言わざるを得ません。かつては文明の後進地域でありながら、あつという間の二、三百年で世界中の海と

陸地を征服できたのは、ひとえにその残虐さに負うところが大きいです。キリスト教をベースに組み上げられた彼らの支配思想の根本にあるのは、白人だけが人間であつて、白人以外は人間じゃないという差別主義です。白人の侵略の先頭に立っていたのが常に宣教師だったのは、決して偶然ではありません。神の愛にうち満ちたキリストの教を説きながら、最後はその土地を占領し、土着の文化を徹底的に破壊し尽くした上にぬけぬけと彼らの教会を建ててしまうのが常套手段です。争いにおいては、相手を人間と思わないケダモノのような人間が最も強い。ゆえに有色人種は簡単に殺され、徹底的な収奪を受けたのです。日本にもフランシスコ・ザビエルがやって来ましたが、信長や秀吉は彼らの侵略の意図をいち早く見抜き、これを引き継いだ徳川幕府が鎖国を敷いたお陰で日本は命拾ひできました。

オランダの国際法学者フーゴー・グロチウスは、国際法の大家と言われていますが、所詮、西洋人のための国際法にすぎません。彼の理論で重要な考え方として、「先取特権」というものがあります。つまり、誰の所有下にもないものは、最初に手を付けた者の所有であると主張しているのです。そも

そも、大航海時代が始まった時点で、南極以外に人が住んでいない場所などありませんでした。しかし、西洋人は、「とんでもない、人なんかいない。原住民などただのサルなどの獣にすぎない」とうそぶくわけです。白人のみが人間で、他は獣だということで、彼らは良心の呵責に悩むこともなく、まるで害虫を駆除するように、現地人を殺戮していったのです。例えば、イギリスの海軍士官のジェームズ・クックが一七七〇年にオーストラリアに上陸して以来、三十万人いたアボリジニは二十年頭までに六万人に減ってしまいました。

こうして西欧列強は世界各地で強盗行為を繰り返していきます。その最たるものがイギリスの大英博物館で、世界中の民族の貴重な文化遺産をほとんど持ち出してきた結果が、あの膨大な収蔵物です。あれは大英博物館などと格好付けるのではなく、正直に泥棒博物館と名乗るべきでしょう。このように、ヨーロッパの文化や芸術があんなに繁栄したのは、世界中から盗んできた富があればこそです。働かなくてもいい彼らは、思索に耽ったり、彫刻に没頭したりしてきたわけです。西洋絵画の素晴らしさを賞賛する人間は、その背景にどれほど多くの有色人種が犠牲

になっているかまで含めて考えるべきなのです。

しかし、司馬遼太郎が美化してやまない明治政府は、そんな強盗国家からお雇い外国人を法外な俸給で招聘します。ここでの学問とは、文明国である英独仏の書物を翻訳してひたすら覚えていくというものでした。明治の日本人にとって、学があるというのは、西洋を知っているということだったので

極めて残念なことに、こうした西洋志向の伝統は現在の大学教育においても生き残っており、一部の大学を除いて、日本人が知るべき日本像は何も教えていません。日本人の立場からの天皇制についての教育研究は甚だ不十分ですし、氏神様や神社など全く蚊帳の外で、西洋学の範疇には存在しないのです。天皇制を奉じ、氏神様を崇める私のようなアプローチでの日本研究は、原始的な野蛮人の所業であり、西洋の学問レベルから相当遅れていると見られてしまうのです。運輸・通信技術が発達した現代では距離の意味が著しく低下したとはいえ、西洋との地理関係によって世界の各地域は序列化されています。西洋に近いほど文明があり、中近東、近東、極東と離れるに従って野蛮とみなされます。つまり地理的

には日本は一番野蛮だということになります。西洋の学問と思想体系にどっぷり漬かってしまうとこの現実を捉えにくいですが、例えば、イスラム的価値観に対する欧米諸国の態度を思い起こして下さい。イスラム世界は長い年月をかけて歴史を紡ぎ伝統をつなぎながら現在の価値観を育み、社会を築いてきたわけです。これは本来、他人に批判・非難される筋合いのものではありません。にもかかわらず、日本人の多くは欧米に同調してイスラムの後進性を指摘します。これこそ西洋文明による世界の序列化と同時に、西洋の価値観に同化させられた日本人を象徴するエピソードと言えるでしょう。西洋の学問体系の立場からは、イスラムよりも更に未開に位置するのが日本であり、日本人はそんな日本には目もくれずに、西洋の学問を懸命に学んでいるというわけです。このような状況ですから、日本のことを敢えて勉強する人はほとんどおらず、日本とは一体何なのかということを誰もわかっていません。しかしながら、西洋文明を突き詰めた結果、いま世界中で多くの社会矛盾が生み出され、人間の生存を脅かすような環境問題が引き起こされていることは、誰しも同意できるはずで

宮は、深い森の中で二千年前から変わらぬ姿を今に伝えていきます。このことが持つ意味を知り、今こそ原点に戻る必要があるのではないのでしょうか。

●日本の本質とは？水と自由と安全の国

日本という国の本質を語ろうとするとき、歴史学者は何年に何が起きた、などの現象面ばかりに気を取られ、地理的条件を見落としがちです。本当は、地理と歴史の間で現象が起こっているんです。地理は現象が起きる舞台であり、歴史はその現象に対して物語を考える役割です。まさに地理は歴史の母と言えます。ですから、日本を知るには、まず日本が占めている地理的な位置の意味を、深く考察すべきです。私が見るところ、こんなに物語った地理を持つ国はありません。

我々が知っている日本の歴史は、なぜあのような展開を見せたのか。なぜ大和魂ができて、天皇制ができたのか、地理を見ることがその理解は格段に深まるはずで

まず、日本では春夏秋冬、四つの季節があります。ゆえに四季の島という意味でシキシマの国とも称されています。もっとも、その土地に季節が存在するためには、そこに住む人間の側に

季節という感覚があつてこそです。和歌や俳句には季語を読み込むルールがありますが、日本人のこうした繊細な情緒は、日本の地理的条件の中で、数千年にわたって育まれてきた大切な財産だと言えるでしょう。

季節感は極めて大事な感覚で、日本人の生活リズムを形成しています。日本の季節は春夏秋冬の四つだけではなく、毎月十五日を区切りとして、更に二十四節に分かれています。春分、秋分、冬至、夏至のほか、立春や啓蟄などたくさんあり、それを意識しながら暮らしているんです。

例えば、牡丹餅。これは作り方も材料も外見もおはぎと同じだが、春、ボタンが咲くころに供される餅なので、牡丹餅と呼ぶ。一方、萩が咲くころに供されるものは、おはぎと呼ばれる。同じ食べ物も季節によって呼び方が変わるという特殊な習慣を日本人は続けてきました。それほど季節に対して敏感なのです。

日本の文学となると、更にこの傾向は強く、十二カ月の季節の移ろいを抜かしたら、ほぼ成り立たない。四季の変化を抜きにして日本の芸術はありません。対して西洋の芸術家の作品には四季を感じさせないものが大多数です。このことに気付いたのは最近なの

ですが、どうも彼らが美しいと思うものは、人間の中にしかないようなのです。レオナルド・ダヴィンチのモナ・リザとか、ミロのヴィーナスとか、ほとんど人物だけしか描いていない。肖像画ばかりです。人間中心の芸術。人間も人間中心です。「我思うゆえに我あり」や「人間は考える葦だ」とか、そういうことしか考えていない。人間だけが中心にあるのが西洋文明なのです。

ところが、松尾芭蕉は「古池や かわず飛び込む 水の音」「静けさや 岩にしみいる せみの声」と詠むので、セミもカエルも、西洋の芸術においてはポジティブなモチーフとしては出てきません。また、井戸で水を汲もうとしたら釣瓶に朝顔が巻き付いているのを見た加賀千代女は「朝顔に つるべ取られて もらい水」と詠いました。朝顔の蔓をちぎるのが可哀相だと、わざわざ隣家へ水をもらいに行く心。これは西洋にはない感覚であり、思想でしょう。このように、暑さや寒さ、降雨量といった住環境は、民族集団レベルにおいて物の見方や感じ方を大きく左右する要素なのです。砂漠の国から生まれたキリスト教をベースに生きる人間と、びしょびしょしたウエットな島国育ちの人間では、基本的な考え

方が全く違って当たり前というわけ
です。

もつとも、日本の特徴を評してベン
ダサンは「水と自由と安全がただの国
は日本だけだ」と言っています。世界
の多くの国では水のために大切なお金
を出していますが、日本人にとっての
水は天からタダで降ってくるもの。水
のためにお金を使うことなど考えられ
ないほど豊かな水資源に恵まれている
のです。となれば、日本人が置かれた
住環境は天佑とも言えるものであり、
そこで形成された日本人のメンタリ
ティこそが世界的に見れば特殊なもの
かも知れません。

んでした。明治期に入ってきたリバ
ティーやフリーダムという概念を前に
して、福沢諭吉たちは頭を抱え、苦心
の末によりやく自由という言葉を作り
出したのです。

そして、なんと言っても安全な日本
の社会。こんな国は世界にはありませ
ん。西洋ではいかに生きるか、いかに
生き延びるかを常に考えております。
いつやられるかわからない。自分以外
は全部悪であり、敵だと思ふんです。
だから、常に警戒している。また、お
隣の中国大陸に目を転じれば、シナ人
は莫大なコストをかけて、自らの手で
二千キロにわたる城壁、万里の長城を
築いています。二千年も前に築かれた
人類最長の建造物は、大陸に生きる人
間の警戒心の象徴でしょう。北から幾
度となく攻め寄せる異民族は、とてつ
もない恐怖を与えていたことは間違
ありません。しかし、そんな努力の甲
斐もなく、しばしば長城を越えて中原
を侵され、最後はフビライ率いる異民
族帝国の元によって全土を支配される
のですから、大陸に生きる民族には、
どうしてもDNAレベルで他者への不
信感が染み付いてしまうのです。

の性は善であるという考え方を日本人
は持っているんです。互いに相侵さず、
自分が属している共同体の維持発展の
ために協力していくことに高い価値が
ある国なのです。もちろんこの前提に
は、日本が島国で、四方を囲む海が天
然の万里の長城の役目を果たしてきた
という地理的特性があります。こうし
た環境では、意思の疎通が決定的に不
可能な外敵からの侵攻は稀であり、そ
もそも国防の思想が根付きにくい。ミ
サイルなどの軍事技術が発達した現代
においては、国民全般に国防意識を喚
起していくことが大切でしょう。

●日本人の精神構造について

豊かな水に恵まれ、四季の移ろいに
合わせて千変万化の美しい装いを見せ
る日本列島。自然の変化を敏感に悟り、
受ける恵みを八百万の神に感謝しなが
ら楽しむ暮らしは、日本人の思考や感
性に大きな影響を与えてきました。私
たちが話している日本語は、まさにそ
の集大成と言えます。

まず、日本語の最大の特徴である、
漢字仮名交じりの記録方法。この表現
形式自体が極めて独創的です。古代の
日本においては、記録用の言語は漢文
調で、固有名詞には当て字を行ってい
たのですが、やがて日本人は自らのネ

イティブ言語である、やまとことばに
も当て字表現を行うようになりまし
た。七世紀に編まれた万葉集の
四千五百首は、このような万葉仮名で
記されています。そして、万葉仮名の
一部を省略して成立したのが片仮名
〔伊〕↓〔イ〕などであり、草書体
を更に崩して成立したのが平仮名
〔以〕↓〔い〕です。輸入した漢字
を出発点としながらも、全く独立の文
字体系を作り上げた先人の創意工夫に
は敬服せざるを得ません。それでいて、
漢字が捨てられることなく、字義に応
じた、やまとことばへの翻訳(＝訓読
み)が与えられることで、いまや日本
語の一部として消化吸収されていま
す。このように、普段私たちが何気な
く書き記している日本語は、そっくり
そのまま日本人の豊かな感受性や創造
力を表しているのです。

日本のこどもは小学校で漢字を千字
習います。更に中学校で千字を加え、
高等学校を卒業するまでには最低でも
三千字、一生を終える頃になれば大抵
の人が五千字を知っているそうです。
これに片仮名と平仮名の言葉交えな
がら、的確な「てにをは」で連結する
ことで、私たちは日本語のコミュニ
ケーションを行っています。つまり、
それ自身で既に意味を持つ文字五千字

を自由自在に組み合わせているということ。例えば、「美」という文字なら、美術、美容、美酒爛漫、美術館といった具合に無限の表現ができるんですね。日本人は模倣が上手だなどとしばしば言われてきましたが、このように無限の組み合わせを持つ日本語という思考ツールによって新しい概念や発想を生み出してきた、というのが正しい評価ではないでしょうか。

他にも日本語の素晴らしさは幾らでも挙げられますが、冒頭でも述べた日本人の感謝と謙譲の心を最もよく示している点で、日本語の「お」は大変重要な言葉だと思います。相手を信頼し、尊敬する言葉として私たちはこれを毎日無数に使っています。一日に六百〜八百回も使っていますから、余りに当たり前過ぎて私は今まで使っていることにすら気が付いていませんでした。一家の中であれば、お兄さん、お姉さん、お父さん、お母さん、訪問者があれば、お客さんと呼びます。自分以外の者にはみんな必ず「お」を付けて尊敬しているのです。相手に命令する時ですら、お入りなさい、お出かけください、お座りください、という具合に、「お」は欠かせません。また、対人関係だけでなく、体の各部にも全部「お」が付きます。お顔、お鼻、お耳、お腹、お

へそ、お尻、果ては排泄物のおしっこ、おならまで「お」が付いてきます。何でも「お」を付けないではいけないほどに感謝しています。食器関連では、お膳、お椀、お盆、お鉢、お箸、食材ならば、お魚、お肉、お野菜、調味料にまで、お塩、お酢、お砂糖、お味噌、お醤油、これほど謙虚な民族が他にあるでしょうか。私たちは自分が「お」の中で生きていることに気がつきませんが、考えてみれば、お家、お部屋、お墓、お宮、お寺、お天道様、おひさま、お山など日常生活には「お」が溢れているのです。これが意味するところは、あらゆるものに日本人は神を見ているということ。岩や大木があれば、しめ縄を張って神様として崇めます。井戸端には水神様、台所の囲炉裏には荒神様、春にはサクラの花が美しく咲くのは、つぼみの一つ一つの中に神様がいて、つぼみの一つ一つの中に神様がいて、春の草木も、その一つ一つの芽に春の神様がいて、からなのです。八百万の神と言いますが、これでは八百万どころではおさまりません。神様はどこにでもいると考え、そのすべてに感謝を捧げながら生きていくのが日本人の精神なのです。

●日本人が築いた文明とは

日本人の精神の根底にあるのは、自

分以外のあらゆるものに神が宿る多神教の世界観です。片や、現在の世界は一神教を信じる人間が過半数を占めています。キリスト教徒は二十億人、イスラム教徒は十一億人、彼らが奉じる

唯一の神は、一体何を人間にもたらしたでしょうか？同じキリスト教の中でも、カソリックとプロテスタントは血で血を洗う戦いを経験していますし、イスラム教もスンニ派とシーア派で争っています。一体、過去にどれほどの人が一神教のために殺されたか分かりませんし、現在から遠い未来に至るまで、神の名の下に彼らは他者を殺し続けることでしょう。その点、日本では宗教戦争などという言葉はありません。確かに、六世紀に仏教が日本へ入ってきた際には、群臣の間で仏教排斥派と受容派による対立が起きたこともあります。この政治闘争の結果、神道の祭主である天皇ですら仏教へ帰依するに至り、仏教は国家鎮護の大役を担うこと。今日へ続く隆盛を勝ち得ています。しかしそれでも、各地の神社が仏教徒によって侵されることもなく、日本古来の和魂が途絶えることもありませんでした。たとえ中国から先進的な

唐心（からごころ）が入ってきて、日本人は和魂の上に着る装いとして、中華の文化を受け入れただけなので、す。神道、神社、大和心、大和魂、大和言葉、これらすべてが気の遠くなるような古代から続いているのが日本という国なのです。

では、おらかな多神教の精神を持ちながら、日本人はなぜ二千年以上にわたって和魂を維持することができたのでしょうか。その求心力となったのが、全ての生命の源である太陽であり、太陽神の天照大神に連なる天皇家にほかなりません。八百万の神々の更に上位に至高神としての天照大神を据えることで、それぞれ産土神を別にする人間であっても、日本人としての意識を共有することができたのです。日本国憲法では、国民統合の象徴として天皇を規定していますが、あれは昔から日本人が抱いていた天皇像を再確認しただけのことなのです。

そしてもう一つ、日本人の精神の基底部にあるのは海洋民族の記憶です。古いやまとことばの語幹には、太平洋島嶼地域の諸言語と共通点が多々あります。古代日本は海の国だったのです。遙かな縄文時代、まだ米は渡来していませんから、先祖たちは海の貝を採って食べていました。日本は四つの島のうちに三千六百の島があり、総延長にして地球を何回も回るぐらいの長い海岸線を持っています。つまり、そこら

中に存在する入り江や遠浅の海で海の幸を幾らでも採ることができるので、ゆえに古代人はほとんどが海岸線の近くに住み着き、貝を採って食べてマナー良く一箇所に捨てる。それで貝塚が残っているのです。実に豊かに暮らしていたんです。

こうした特徴を持つ日本文明は、当然ながら西洋文明ではありませんし、かといって東洋文明の範疇にも当てはまりません。学者が、世界各地の文明を幾つかに分類したとしても、日本の文明は、どこかと一緒に並べることができません。地域的に見るなら日本はアジアの文明だと思われがちですが、東アジア的な強大な王権を戴かず、母系社会の色も長らく残しています。敢えて言うなら別のアジア、「別亜」なのです。東シナ海で大陸から九百キロ、朝鮮海峡で半島から二百キロを隔てた日本文明は、その和魂にまで影響を及ぼすような強い外圧を、ほとんど経験していません。数え上げれば、古くは白村江での敗戦後、大唐帝国の逆襲に怯えたこともあり、二度の元寇も経験しています。しかし、いづれも国体を揺るがせる大事には至りませんでした。高い生産力に支えられて安定した日本社会は、和魂を捨てたような大変革を自ら行う必要が皆無だったの

です。こうして幕末の開国までの間、海の中で独自の発達を遂げた日本は、まるで文明のガラパゴス（南太平洋の絶海の孤島にイグアナなど独特の生物の生態系をダーウインが調べて、進化論を発見した鳥）だと評する学者もいるほどです。

●オバマのノーベル平和賞の真価

昨年十一月にアメリカのオバマ大統領が来日した際、今上陛下に拝謁した彼は思わず九十度の最敬礼をしました。アメリカは二百三十年の年輪ですが、日本は三千年の年輪の歴史を持つ国です。風格が全然違います。その天皇の前に行く、見事なお辞儀をしたんです。アメリカ国内では、オバマは黒人ですから、アメリカの悪さを悪さとして、日本の良さを良さとして、素直に認めることができるのでしよう。

この訪日に先立つ十月、オバマは「核なき世界」へのビジョンを提唱したことを評価されてノーベル平和賞を受けました。流れから言えば、彼は真つ先に広島を訪問するべきだったはずですが、日程の都合で実現していません。そもそも、ノーベル平和賞には、何かしらの実績を伴わなければなりません。オバマはブラハで「核のない世界を築こう」と話し、国連本部でも核の

ない世界を訴える演説を2回やりましたが、しかし今のところ、具体的なアクションは何もない。ノーベル委員会でも、六人の中の三人はオバマ授章に反対したんですよ。それでも結局渡したのはどういった意図か読み解けば、つまりノーベル平和賞を与えておけば必ず彼は何かやらざるを得ないだろうと、暗黙の強制力を働かせるためだったと想像できます。では、オバマの実績として何が期待されているのか。それは唯一の核兵器使用国としての罪を認めることにほかなりません。核の使用を正当化し続けている者が、核を世界から廃絶しようといくら訴えても、説得力があるはずがありません。

今年十一月に横浜でAPEC首脳会議が行われます。訪日スケジュールが組まれているオバマは、次にこそ広島へ行きたいと言っているようです。私はこのタイミングに密かに期待しています。広島は平和記念公園の原爆慰霊碑には「過ちは繰り返しません。安らかに眠りください」と書いてある。この文章は、逆立ちになっていると指摘したのは、あのパール博士です。東京裁判では日本無罪論を唱えたパール博士は、A級戦犯の被告人と戦勝国の裁判官が、本来の立場と逆になっているとまで主張していました。それが数

年後に来日し、原爆慰霊碑を見てびくり仰天したのです。「過ちは繰り返しません。日本人がああいう悪いことをしたから、もう二度と繰り返しません」と書いてありますが、それはアメリカがやったことではないか。悪魔の兵器を作り出し、人類の頭上に初めて使った者こそ、誰あろうアメリカなんです。日本が謝るいわれは全くありません。アメリカの大統領が来て謝らなくてはいけない。そういうことをパール博士は言っていたんです。

ゆえにオバマは日本へ来て、核のない世界を作ろうと叫ぶだけでは意味がありません。自分たちが核の実験を行い、三十万人を殺した場所、その罪と残虐性を認めることからこそ、核廃絶は大きく前進するのです。これは世界のテレビ局で大きく取り上げられます。日本にとっても、東京裁判史観から解放されるための大きな一歩となるでしょう。

昨年大きく報じられたニュースとしてはもう一つ、足利事件がありました。菅谷さんは殺人犯として無期懲役の判決を受けて収監されましたが、実は無実の罪だったと。それで十七年半も入れられていたのは残酷な話だなど誰もが思いました。検察はもちろんな

がら、とんでもない裁判官だと批判が高まったのは皆さん御存じだと思います。しかし、東京裁判の裁判官は無実の日本を断罪し、多くの戦犯を処刑しています。菅谷さんの十七年半どころではなく、日本は六十五年も犯罪者扱いが続いているのです。日本人は世界に対して犯罪を犯した、戦争犯罪国だと、まだみんなそう思っています。日本が悪いことをした、おじいちゃん、おばあちゃんの時代に悪いことをした国なんだ、そんな思考から脱出してないんです。それは六十五年の無期懲役に当たる、とんでもない話なのです。そうではなく、それは全く逆なんだと、足利事件で裁判官が誤ったように、あの時の東京裁判は誤ってるんです。パール判事が言ったように、逆でなくてはいけないわけです。これに気が付けば日本も無実の罪から解放される。日本のお陰で人類は解放されている。昭和天皇と、昭和に戦った私たちの力で人類を解放したじゃないか。世界の人はみんなそれを知っているんです。それが今の六十歳ぐらいの、終戦直後に生まれて、日教組に徹底的に叩き込まれた、侵略侵略と教科書に書いてますね。それからまだ脱出してない。日清戦争、日露戦争という勝ち戦の後にお亡くなりになった明治天皇を祀

るべく、当時の人たちはみんな感謝の心を込めて十万本の木を植えて、代々木の森を造った。これが明治神宮となった。今や、元旦には三百万人もお参りする日本一の神社になりました。あれは明治天皇の偉さと、明治の人たちの偉大さがみんな入っているんです。明治天皇と明治の人たちは、日本の明治維新をやり、数々の戦勝を収めました。明治は偉大です。ですが、もっと偉大なのは昭和ではないでしょうか。昭和の人たちと昭和天皇は人類を解放したんですから。その点で、あの戦争は実は日本の勝ち戦でした。だからこそ、昭和神宮を建設して、昭和の偉大さを正しい形で後世に伝えていかなくてはなりません。だから、昭和神宮とは「勝った和」と書いて昭和神宮でもいいと思います。勝ち戦だったんですから。六百万の日本人が死んだ結果、人類が解放されました。靖国神社に祀られている三百万柱は決して犬死にはなく、あれは人類を解放した大戦争だったんです。それを叫ばなきゃいけないわけです。でないと、浮かばれないですね。長時間ご清聴ありがとうございます。ごさいまし

「ここに紹介したい未完成の遺稿がある。この遺稿は、平成20年11月25日に51歳の若さで他界された小林広司氏が、逝去される直前まで執筆されていた原稿の「はじめに」の部分である。小林氏は、平成16年8月15日に放送されたフジテレビ終戦記念ドキュメンタリー番組『黒島は忘れない』の演出を担当された。この番組を御覧になった方もおられると思うが、終戦間際の沖縄特攻作戦において、航空基地出撃後、種々の原因から鹿児島県の離島「黒島」に不時着した元特攻隊員と島民との、戦中から戦後にかけての交流をテーマにした物語である。長期にわたる製作期間中幾度となく現地「黒島」を訪れ、全国を廻り、沢山の特攻隊員や島民の方々等関係者に直接会って話を伺い、当時の生々しい事実を取材して一時間番組にまとめ上げた。誠実な方々に出会い、胸の内を伺っていくうちに、監督としての小林氏自身が大きく変わり、想いが深まっ

未完の遺稿の語りかけるもの
『黒島は忘れない』余聞
 (映画監督・テレビプロデューサー
 故小林 広司氏著)

ていった。その想いを書き残そうとしたのが、この遺稿であるという。「特別攻撃隊」のことを深く探究する過程において、特攻隊員たち、それを支えていた周囲の人たちに対する小林氏の見方、気持ちの変化がつぶさに描かれている。今後、特攻隊戦没者の慰霊顕彰を受け継ぎ、多くの人々に参加してもらったための活動をしている我々にとって、貴重な示唆になると考えたので、ここに小林ちえみ夫人による『まえがき』を添えて紹介するものである。

◇ ◇ ◇ 理事長 藤田 幸生 ◇ ◇ ◇

小林ちえみ夫人の『まえがき』
 「ここに亡き夫、小林広司の遺稿を掲載させていただくことになるのは、夢にも思っていませんでした。15歳で映画監督を志し、映画監督、プロデューサーなど、映像にかかわる様々な仕事をしてきた夫が、その生涯の晩年に、彼が描きたいと願っていたテーマ「愛と平和と戦争」に、巡り逢えることができたのは、今にして思えば、天から与えられた贈り物だったのかも知れない、と感じています。未完成の原稿にも関わらず「想い」を受け止めて下さった方に、こうして

巡り逢えましたことは、生かされている私にとって、何よりの有り難いことと、心より感謝申し上げます。

死は決して、終わりではないことを教えて頂きました。

平成二十二年九月二十三日

小林 ちえみ

小林広司氏遺稿

『はじめに』

太平洋戦争の終戦から五十九年目に当たる一昨年、平成十六年八月十五日に、フジテレビジョン系列『ザ・ノンフィクション』で放送された『終戦記念スペシャル 黒島は忘れない 59年目の友よ』というテレビドキュメンタリー番組で、私は演出を担当した。

この番組は、企画書風に一言で言う
と、
『時は昭和二十年の沖繩決戦。本土から分断された孤島、黒島に特攻機が落ちてきた。』

あの時、不時着した特攻隊員たちと島の人々に何があったのか……。あれから五十九年、黒島はその記憶を決して忘れてはいなかった。

今年、黒島に特攻隊員を慰霊し、平和を願う特攻平和観音像が建立された。島を継いでいく子供たちは、それを

どう受け止めるのだろうか……。そして、この作品は、平成十五年の十二月に急遽、企画が立ち上がり、年が明けて取材を開始、二月に企画成立、三月下旬より、五月中旬までの撮影期間を経て、約二カ月半の編集、仕上げ作業の後に完成し、終戦記念日の昼の二時から、一時間番組として放送された。

本来ならば、一ディレクターである私の仕事はそれで終了し、すぐさま、そこから逃げ出すように次の仕事に取りかかる。しかし、この作品はそうはさせてくれなかった。

理由は二つあった。
第一に、ある疑問が頭から離れなくなってしまうこと。疑問と言っても、それは具体的なものではない。解消出来ていないことがあるのだが、それが何なのかすら掴めないという後味の悪いものであった……。

製作中に出てくる様々な疑問は、その都度解消してきたつもりだった。また、この時代の事件の特徴として、正確な記録が残っていない点多かったが、しかし、それは解らないこととして、そのまま描けばいい。決して、その謎を解明することが、この番組の目的ではないと思っていた。

論理的には全て解決していた筈だった。でも、それはもしかすると、番組

を作るに当たったの、取りあえずの疑問だけを解消して、解ったつもりになつてはいないか？ そう思わざるを得なかった。

そして、第二に、伝えるということの重さだ。これは番組自体が、五十九年前の自分たちの国に起こった出来事を伝え、またそれを、将来を担う次世代にきちんと伝えることの重さ、困難さをテーマにしているという点で、二重の意味を持つていた。

そして、番組を作った結果、その伝えるという使命を果たさなければならぬのは、まさしく自分たちであることに改めて気付き、この番組を作るだけでは、決してそれは終わるようなものではないと強烈に思い知らされたからだ。

我々は取材を進め、様々な事実を知ることになった。そこで明らかになったのは、私が特攻隊について、そしてあの戦争について知っていたこと、否、知っているつもりになつていたことが、実は違っていたことが、まだまだあるのだということだった。それこそ、次世代に語り継がなければならぬという使命を果たそうとする時に、我々が知らないままであること、解ったつもりになつてることが一番の問題ではないか！

放送終了後、取材にご協力いただいた方々、見ていただいた方々からご連絡をいただき、またそこから新たな出会いが次々と生まれた。そして、様々な意見や情報をいただいた。そして益々この思いは膨らんでいった。

それだけ大変な作品だったので、ね、と人は言う。確かにこの番組では、関係者への配慮が特に必要であり、見えるものを全て撮影し、知り得た情報を全て公開することが出来ないという表現の枷も多かった。

しかし、それはどんな番組だって多少は避けて通れぬことである。そしてその仕事は困難で、遣りがいのあるものであればあるほど、その取材中に起きた様々な出来事を正確に作品に昇華出来たのか、うまく伝えられているのかどうか、製作中は寝ても覚めても自問自答が続く。

それでも結局は、その作品が自分の手を離れ、放送あるいは、公開、発売した後は諦めるしかない。それを忘れるには、次の仕事に早くかかり、それに没頭することだ。そうして強制的に逃げ出すことなのだ。そうでなければ、こんな商売、仕事として、やってはいられない。そんな習性や身に付いた私にとっては、今回は初めての経験だった。

そこで、放送後、私は手元に残った撮影日誌やメモ、資料を基に文章にすることにしました。そうして一旦、この年に私が知った事実を出来るだけ、有りのままにまとめておくことから始めようと思ったのだ。しかし、手元には特攻隊関連の資料はほとんど増えて行くにも拘わらず、作業は進まなかった。

それは、前述したような漠然とした疑問が、自分の思考を止めてしまっていたからだ。

そうこうするうちに年が明け、平成十七年は終戦六十年に当たるといこうとで、年頭からマスコミでは、太平洋戦争の記憶を辿る話題が多く扱われることとなった。

私もそこで、何かを発信したいという欲求に駆られてはいたが、その時点で私の作業は止まってしまったままだった。全く疑問は解消されていなかった。

やがて春以降は、小泉首相の靖國神社公式参拝を巡る問題が、中国、韓国との外交問題に発展し、靖國神社の問題がマスコミを賑わすこととなった。そこに来てやっと、止まっていた私の中で、何か動き出した。

それは全く単純なことから始まった。私の中で、靖國神社に対する思いが、この一年で全く変わっているこ

とに改めて気付いたのだ。

靖國神社と私の関わりに関しては、改めて本文で触れたいと思うが、ある時期から、靖國神社は肯定していたし、日本国首相の公式参拝も当然だと思っていたので、その変化は、靖國神社の在り様でも、取り巻く社会状況とは関係のないものだった。

それは全く個人的な感情だった。うまく表現が出来ないのだが、私自身の靖國神社に参拝する目的、気持ちが変わらかに変わっていたことに気付いたのだ。

それは、まず、最初に頭を垂れて、あの方々に感謝をすることだった。あの方々は、取材を通してという、こちらの側からの一方的な接点ではあるが、それでも、その誠実な、また壮絶な生き様を私に見せてくれた特攻隊員の方々のことだ。

そして、それは頭で考えてしたことではなく、自然にそうなること。自分で気付いた時、共に散華することを誓い合ったにも拘わらず、思いもかけず命を与えられ、戦後を生きてこられた元特攻隊員だった先輩方が、どんな気持ちで靖國神社に参拝されているのか身に染みて判ってきた。

いや、昭和三十三年生まれで、戦後の高度成長に乗って育ってきた私が、

判ったなどと言うのはおこがましいことに違いない。

それでも、何かを感じ始めた私にとっては、この年の夏にかけて、マスコミの様々な場面で繰り返された、靖國神社に関する議論、例えば、内政干渉云々、合祀問題、宗教問題、軍国主義の復権か、不戦の誓いか等々、全体的が外れているように感じていた。

そして、その違和感は、私が昨年の取材中に感じていた、漠然としていた大きな疑問と重なり合って具体的に姿を現し始めていた。

こうして私は、この終わった筈の仕事から離れられずにいた。いや、離れたくないというのが正しかったのかも知れない。では、今回の仕事はそんなに楽で、居心地が良かったのか。若しくは遣り残したことが多かった番組だったのか。

そんな訳はない。ただでさえ、死の淵に立たされていた人の、忘れてしまいたい思い出を抉り出すように聞き出すことの辛さ、そして、次々と涙と共に語られるその悲しいエピソードの数々。

さらにその重苦しさは、撮影時だけでは終わらず、その成果である、九十時間にも及ぶ撮影済みの中に埋没していた、二カ月半の編集期間も続いてい

た。常にこちらも居住まいを正さなければならぬ思いに、緊張を強いられない日々だった。居心地が良い訳はない。

だが、とも思う。我々が聞いたこの戦争の時代の話が、全て辛ければかりだったのか？それは決してそうではなかった。

今回、お話を聞き出来たのは、殆どが当時十代から二十代半ばであった方々だ。丁度私の親の世代に当たり、誰もが輝かしい希望に満ち溢れている筈の青春時代を戦争に奪われていた。

しかし、如何に暗い時代であろうとも、鮮明に記憶に残っている青春があり、それを懐かしむように、時に失礼なこと、丁寧に答えていた。

私は、この番組は事件だけを追っただけでも成立しないと考えていた。私がお聞きしたことは、生い立ちや、家族のこと、日々の生活にまで及んだ。何故かというところまで聞かなければ、我々には理解できないことだらけだったから。

しかし、そんな話を聞いている時間は、その話が最後には悲しい結末を迎えることが判つていながらも、ホッと吐息を抜ける楽しい一時だった。

さらに我々は、お話を聞く時には、

出来るだけ自然に思い出しほしかったこともあったし、映像でより具体性を持たせたかったからだ。それは、直接事件には殆ど関係ないことも多かった。人によっては一回三時間にも及ぶインタビューにもなった。それいも皆さんは快くお話をしてくださった。

そのお陰で我々も、その空気が、体験を共有し、一緒に追体験することが出来た。

それは、貴重な体験であり、その結果、徐々に理解出来たことは数限りなくあった。

例えば、特攻隊員にとつて、離陸してから突入地点に到着するまでの、機内での約二時間余り、その間の心情は如何ばかりか、と思っていたのだが、それと同じくらい辛い時間は、出撃命令が下り、全国の原隊から九州の基地に前進し、実際に攻撃するまでの待機の期間だったということ。

短い人で一日、長い人はそれこそ数カ月に及ぶ待機の日々である。基地での顔見知りといえば、同じ隊の数名の同僚しかいない中、彼らはどうやって平常心を保とうとしていたのか。

そして、出撃が決まっても、その当日、機体不良など様々な理由で、共に散華を誓い合った同僚を見送らざるを得なくなった時の心情……。

さらに、その同僚が沖繩上空に到着し、敵艦目がけてその身諸共体当たりするまでの約二時間を過ごすことが、如何に辛いことだったか。

勿論、私もそれは知識として聞いて知ってはいた。しかし、それが身に染みて分かってきたのだ。

また、辛い思いをしたのは特攻隊員だけではない。島に不時着した特攻隊員の世話を献身的にすることになった娘たち。同じく基地の町で隊員の世話をした娘たちも同じだった。

如何に軍神の特攻隊員とはいえず、二十歳前後の少年や青年たちだ。彼らを迎えた娘たちのときめきはどうか。たろうか。しかし確実に、やがては彼らを死地に送り出すことが誰にも分っていることなのだ。その別れの気持ちはどうなるに悲しいことだったろう。

そんな青春の日々の中に、濃密な時間や、人を思い遣る優しさや、誠実な心があったのだ。愛があり、友情があり、淡い恋もあった。

それだからこそ、その人たちが否応なしに巻き込まれた戦争の悲劇があり、戦争が抱える矛盾の中、運命に翻弄され、流されて被害者となったのだ。だからこそ悲しいのだ。

そして、その生き残った者の悲しみは、終戦の時が来ようとも、平和な時

代に生きていようが、その胸の内からは消え去ることがない。だから辛いのだ。

そんな人たちの話を、すべてお涙頂戴の悲しい話として伝えることがいいのか？そんな疑問は取材を進める中、益々、私の中で膨らんでいった。

撮影中のパートナー、カメラマンの濱元二男は、気さくで、子供好き、几帳面で、何よりもテレビカメラマンという仕事に誇りを持っているナイスガイだった。約一カ月半、私は濱元と二人だけという最小のクルーで仕事をこなし。

今回は事情により、ロケ班や事前取材もせず、いきなり島に乗り込んでしまった我々は、昼間の取材、撮影と平行的に、毎晩、私は彼に、今まで自分が知り得た限りの情報を全て話し、取材対象者について語り、その撮影方法を相談しながら作業を続けていた。

様々な話をする中で、濱元は今までの彼の内にあった特攻隊に対する印象が変わってきた、と話し始めるようになってきた。

彼は種子島出身で、鹿児島でカメラマンをしている男だ。当然、その土地柄、私よりも特攻隊に対してはより身近に感じており、旧知覧基地での取材も数多く経験していた。そんな彼が、

かつて某テレビ局で知覧の取材をした際に感じたことを語り始めた。

ディレクターは、取材相手の話を聞いてくつより、ここぞとばかり、取材相手の涙を誘う質問を繰り返した。そして、あの戦争を、あの時代を、そして特攻作戦を、ひたすら悲しいお話しに作り上げたのだという。取材現場では漠然とした違和感が続いてきたが、その出来上がりを見た時に、濱元は憤りすら覚えたのだという。

それは我々としても、気を付けなければならぬことだった。「わかる！わかるよ、濱元！俺はそんな番組は作るつもりはないから……」

確かに、起こった事件を追いかければ、戦争の悲惨さを描くことは出来る。それも必要なかも知れないが、それでは大事なことは伝わらないのではないか。

今回の取材は、当時の関係者だけではなく、島の中学生ももう一方の大事な取材対象だった。あの当時のことを、この世代はどのくらい知っていて、どう感じるのかを知りたかった。

彼らは皆一様に、戦争があったこと、日本は負けたこと、戦争で多くの人が亡くなったこと、そして戦争はしてはいけないこと、漠然とは受け止めていた。それは予想通りであったが、思っ

た以上に、個人差が激しくあること、それと、あくまでも他人事であり、それが自分たちの祖父母に起きた出来事であるという現実感がないこと、そして、戦争の被害者であることはある程度の想像力は働くものの、如何に戦ったか、如何に耐えたかに関しては、殆ど興味は持てないようであった。

ましてや、『特攻』に関しては、言葉としては知っているが、それ以上でも、それ以下でもない、何の興味も想像力も持っていないようであった。

当然、この世代に、あの時、この島で起きた出来事を伝えるためには、まづある程度の知識をこちらから与える必要があった。

そして、これは番組の構成自体にも関わる問題だった。

誰もが知っているつもりになっている『特攻』をもう一度、ここで確認する。

『特攻』それは特別攻撃の略であり、航空機、潜水艇などに大きな爆弾を装着し、搭乗員もろとも、敵艦船に体当たりをする作戦のことである。この作戦は、太平洋戦争末期の昭和十九年十一月、フィリピン攻防戦において、必勝を余儀なくされた海軍航空隊に、正式な攻撃作戦として発動された。

戦闘行動中には、自らの命を捧げる

ことは、珍しいことではないし、それは決して我が国の軍隊だけの話ではない。しかし、この人の命を軽視した攻撃が、国の正式な作戦として採用され、計画されたことこそが『特攻』の特徴があり、それに呼応した青年たちの愛国心と抵抗は、世界史上に記録されたのだ。

それでも日本軍は、敵の圧倒的な物量には歯が立たず、壊滅状態に陥った。そして、敵の本土上陸を目前にした我が国に残された攻撃手段は、もはやこの『特攻』しか残されていなかった。

昭和二十年三月、沖繩に迫った敵機動部隊に対しての、沖繩特攻作戦が発動された。その作戦に自らの身を投じたのは、その殆どが十代の半ばで予科練などに進んだ少年航空兵と、昭和十八年に、大学を繰り上げ卒業して志願入隊したか、同じ年、学業半ばで徴兵され、学徒出陣青年航空兵だった。

彼らが、特攻隊編成に際して、それが志願だったのか、強制だったのかは部隊によって分かれるところであるが、いざ彼らは航空兵に志願した時点で、自分の肉親を、大切な人を守るために、自らの命を捧げる覚悟をしているところでは、皆同じなのである。その上に、『統率の外道』とも呼ばれた特攻作戦は計画され、実行された。

しかし、当初は特攻攻撃に恐れをなす、為す術もなかった敵機動部隊だったが、この時期には、完全に攻撃を封じる作戦を編み出しており、その効果を上げることは、殆ど出来なかった。

昭和二十年六月、遂に沖繩も陥落した時点で、来たるべき本土決戦に備えて、日本各地に特攻攻撃基地が作られ、本土防衛のための『特攻』は、散発ではあるが、あの八月十五日当日まで続けられた。

その『特攻』によって未帰還とされている死者の数は、四千人を超える。

そして、出撃待機のままで、敗戦を迎えた多数の若者が『生き残り特攻隊員』と呼ばれ、社会に復帰していった。その中には、出撃命令を受けたものが出撃が叶わなかった者、機体不良により不時着した者、ごく稀ではあるが、敵艦に突入、あるいは撃墜されて敵側に救助され、捕虜となった者も含まれている。

我々は取材が進むにつれて、この黒島という島で、生と死の狭間でもがいた特攻隊員たちと、彼らを助けた島の人々が、無心で他人のことを思い遣り、他人の面倒を見て、助け合い、必死に生きようとしていた姿が目につかぶようになつてきた。

しかし、このような姿は、当時、こ

の黒島に限らず、各地で見られたに違いない。特攻隊員と一般の人との交流は、まだまだあるはずだし、これは何も特攻隊だけに限ったことではない。何よりもこの時期、全国の若者たちが、以心伝心で立ち上がり、また、それを支えた人達がいたのだ。

誤解を恐れずに書くと、我々は漠然と羨ましさも感じ始めていた。そしてそれは、黒島での最後の晩にはつきりと私の前に現れた。

翌日、島を離れる当時の関係者、そして我々スタッフのために、島の方がお別れの宴を催してくださったのだ。

その場には二十代から、当時を知る七十代、八十代の方々まで、色々な世代が集まっていたにも拘わらず、語り、踊り、唄ううちに、年代は関係なく、全ての人があの当時、五十九年前に戻っているように思えてきたのだ。あの時も、そして戦後も、こうしてこの方たちは絆を確かめ合ってこられたのだと感じた。そして、そこに居合わせた私も、確実にあの時代に戻れた気がしていたのだ。それは楽しく懐かしい時間だった。

島から東京に戻り、編集作業に取りかかった私は、幻のようなその晩の宴で感じた、あの羨ましさ、懐かしさを少しでもこの番組に投影することが出

来ないかとあがいたが、遂にそれは果たせた確信が持てないままで番組は放送された。

そこには、私の主観など必要なかつたし、私はそれを論理的に語ることも出来なかったのだ。

それから、そのわだかまりは私から付いて離れず、疑問を解こうとして、自分の過去を見直し、そして親を思い、先祖を辿り、特攻隊の慰霊祭に参加し、その記録をし、靖國神社にお参りをした。もうそれは、仕事のためだけではなく、明らかに自分のためだった。

次の世代に語り継ぐためには、自分が分からなければならぬと思つていたので、それからだった。

今、それが少し分かったような気がして、これを書き始めている。それは昨年、書くことを思い立ち、再びお会いした特攻隊員の方の、何気ない一言が切っ掛けとなった。

またまた誤解を恐れずに書くと、昭和三十三年に生まれて、あの戦争を全否定した戦後に育つた私の頭には、それが分かるまで、これだけの時間が掛かってしまったということだ。

現在、『特攻』については様々な論議がなされ、大きくは『英霊論』と『犬死に論』に分かれてしまうようだ。しかし、それは、特攻作戦という戦法を

考え出し、実施した旧日本軍全体のこととして考えられているからだと思えて仕方がない。

実際出撃していった特攻隊員が、戦中、戦後を通して、どんな苦しみを受けてきたかを考えた時、胸が苦しくなるほどの悔しさや怒りを覚える。

どう考えても、特攻隊員の死は、決して『犬死に』なんかではないのだ。敵、アメリカの機動部隊は、特攻機を恐れる余り、沖縄特攻作戦が始まると、全国の都市空襲を中止し、九州南部の航空基地の重点攻撃に全力を尽くした。そして、リーダーによるピケットラインを張り、特攻機に対する防御に追われた。沖縄が陥落した後、アメリカが本土上陸をためらったのも、特攻攻撃を更に上回るであろう、日本軍の一億玉砕を真剣に恐れていたからだ。

それでも『犬死に』と言われるのは、様々な理由がある。

例えば、出撃した特攻機の三分の一が機体不良で帰投、若しくは不時着又は海没していること、殊に陸軍の特攻機は洋上航行が出来ないので、方向が分からなくなり、多くが海没しているという説さえある。また、残りの三分の二にせよ、その殆どが途中で敵戦闘機に発見、撃墜されていて、目的地の

沖縄海域に着けなかったというのだ。

しかし、それは全て、そのようなおろそかな計画を立てた軍部の問題である。

また、たとえ敵艦船に突入しても、思ったより敵の損害が少なかったとも言われる。これも様々な理由が存在する。本来の戦闘機の能力を無視した攻撃に無理があったこと、幾ら、出撃前に一週間程度の錬成飛行をしたところで、搭乗員の練度が低く、操縦もままならなかったこと、また、特攻の成果を見届ける航空隊の搭乗員すら、経験が少ないため、特攻機の墜落を撃沈と見間違えた報告が多数上げられたこと等々である。

これこそ、航空兵の補充を怠り、戦争末期に慌てて速成し、飛行時間百時間そこそこ、普通なら離着陸もやっとなという状態の学徒兵、少年兵を特攻出撃に向かわせた方に問題がある。

さらに、第一線から退いた老朽機九百機、練習用飛行機千二百機が特攻作戦に投入されたこと、燃料不足から松ヤニを精製した航空燃料で出撃せざるを得なかったことなど、整備兵を含めて前線兵士の問題ではないのだ。

これとて、航空機の製造が追い付かなかったのは国力の違いで仕方がなかった、と現在では説明されている。

しかし、その実態は、戦争末期こそ航空機製造数は増えたのだが、それまでは、航空機用のアルミニウムが明らかに横流しされており、航空機にはならなかったという事実も発覚しているのだ。

これには大本営による虚偽の発表により、航空戦力の損害が伏せられていたことにも原因があり、航空機の不足が分かっていたにもかかわらず原因だという。

この事などは、軍部の自己保身と、それに結託した財界とが、如何にこの戦争を私物化していたかの一端である。これこそ、真に恥ずべき行為ではないか。

こうして、特攻隊員は、戦中は軍神と崇められ、その反面、尊い命を消耗品の如く扱われ、終戦を迎えた途端に、その目的を奪われ、呆然自室に陥つた。敗戦国となり、戦勝国の流儀を受け入れた世間の目は、てのひらを返したように冷たかった。

一方、戦友との約束を果たせないまま、命をながらえて復員した『生き残り特攻隊員』に浴びせられた言葉は、「一人だけ、おめおめと生きて帰ってきやがって・・・」だった。行き場がなくなつた一部の青年たちは愚連隊となり『特攻隊くずれ』という言葉も生

まれた。

そして、『特攻』は、そのまま、旧日本軍の忌まわしい記憶とされ、封印された。

もし、本当にその尊厳に満ちた、誇りある彼らの死が『犬死に』だったとするならば、そのように貶めてしまったのは、明らかに自分たち、戦後の日本国民だ。

その何重にも及ぶ苦難の中、忘れていが忘れられない思いを持ち続けた関係者、遺族、また生き残った特攻隊員の人々、その記憶の中で、散華された特攻隊員たちは生き続けてきた。

驚くべきことに、その元特攻隊員の方の多くは、その自らの体験を妻や子供たちにすら、明かしていない方が殆どなのである。そうやって、誰にも告げず、ひっそりと慰霊の旅を続けてこられたのだ。

その慰霊行事は、長い年月を経て、形を変え、様々な組織の下で続けられてきたが、その方々も高齢化した現在、その存続が危ぶまれ始めている。そして、そんな五十九年を経た一昨年に、黒島に特攻平和観音が建立されたのは、決して偶然ではないのだ。

私は、決して霊的な感覚は持っていない。特定の宗教に帰依しているわけでもない。それでも、これまで主に映

画というものに関わってきた経緯の中で、『人の思い』の存在には敏感な方だと思っている。

私が学んだ映画というものは、人間を描くこと。そして、人間を描くということは、人と何らかの関係、それは人対人、また人と自然もあるだろうが、何らかの人の関係を切り取って画面にしていくことだった。

その関係を作るものこそが、人の思いであり、愛であり、記憶であり、念であり、それは時には奇跡を起こし、あるいは大惨事を巻き起こすこともあるのだ。

そんな『人の思い』に関わってきた中で、作品を創る過程でも、私自身、他人に話したら、不可思議だったり、思い込みと言われるような体験をしてきた。

そして、それは、今回の番組でもそれはあった。

例えば、島に入って、一週間ほどした頃から、首に異様な重みを感じるようになっていた。慣れない気候、環境の中で緊張してのことだろう、と初めは気に掛けずにいたが、この首の痛みは、島を出て鹿児島に上がると嘘のようになくなり、また島に戻った途端に戻ってきた。これは、撮影が終わるまで何回か繰り返された。それは、これ

まで、肩こりすら余り感じたことがなかった私には、初めて感じる身体の辛さだった。

スタッフ、関係者には、「それね、小林さんに誰か憑いてるんですよ」とか、「まったく、監督はのめり込みやすいから・・・」と、様々に冷やかされていった。

しかし、それは現在までずっと続いている。自分では当初ただの疲労だと思っていたし、いわゆる年齢による身体の痛みでもあると思っていたのだが、不思議なことに、靖國神社で慰霊祭に参加し、撮影している時はその痛みから全く解放されていた。家に帰ってそれに気付き、直ったと思っていると、翌日また痛みが戻ってくる。

そんなことを不思議に何回も繰り返しているうちに、自然に受け入れるようになってきた。大げさに言うと、自分一人の痛みではないような気すらするのだが、それでもよいと思っている。

勿論、医者から言われるように、これは年なので仕方ないのだろうし、実際、今までの不摂生な生活の結果なのだろうとも思う。

でも、今回のことで、自分がこのような年齢に達していたことを自覚させられたのも、また事実なのだ。そして今、もうこの問題から逃げてはいけな

い年になったのだ、と感じている。

今、ここで何か形にしなければと思いはじめた。そうでなければ、私は何でこんな仕事を始めて、今まで続けてきたのだろうか？

終戦六十年に当たる昨年、平成十七年は、終戦記念日を中心に、テレビ、新聞始め各メディアはこの問題の特集し、特に、テレビでは今までになく、様々な番組が放送された。

しかし、その多くの番組の中で、戦前を知る人たちが、旧軍の方々は、「あの日本の心、日本人の心を忘れないで欲しい」と、繰り返し、次世代を担う番組製作者たちは、「我々は歴史を再検証する必要がある」と、締めたに止まった。それは、私には、果てしなく平行線を辿る議論にしか思えなかった。

特に印象的だったのは、戦前を知る人々の中でも、イデオロギーの違いから、歴史認識が全く違っていることが、はつきり浮かび上がってきたことである。それでも、これからの日本人に伝えたいことは、『あの日本の心、日本人の心』であることは一致していることだった。

あの時、何故、青年たちが国を守るため一斉に立ち上がったのか。

その答えは現在でも幾つか考えられる。壱部の軍部の独走、あるいは、軍部

独裁による恐怖政治、新聞、映画等マスコミ、文化人の後押し、そして教育の問題、それこそ一種のマインドコントロールがあつたかのような意見もある。

ただ、そこからは強制力を感じるものの、自発的に立ち上がり、助け合った人々の心は伝わってこない。ましてや、あの時代、戦前にあつたという『あの日本の心、日本人の心』は、全く見えてこない。

しつこいようだが、決して分からないのではない。ただ、分かっているつもりにはなっているのだが、恐らく実感は伴っていないのだ。

伝えられるべき、伝統が途切れつつあることは確かなのだ。これが戦争に負けたということなのだろうか？

確かに歴史を検証することは大事なことだ。あの戦争の責任を自分たちの手でしっかりと見極めることも必要かもしれない。その上でもっと自分たちの歴史教育にも力を入れなくてはならないのかもしれない。

しかし、政治的、あるいは歴史的な観点から、これまで以上に検証することとは可能なのだろうか？戦争責任をこれ以上明らかにすることが意味のあることなのだろうか？しかも、それを誰かに託す以前に、もっと個人がしなくてはならない、大事なことがあるので

はないか。

それは、『国家』や『集団』ではなく、個人の『人の思い』を知ることなのではないか。

勿論、戦争という国を挙げての、そして集団の狂気は、正常な人間の判断力を奪っていくものであろう。それでも、いや、それだからこそ、一人一人の『人の思い』を知ることが必要なのではないか？

勿論、それには、語る側も、聞く側も共に、勇気を持ち、真摯な気持ちにならなくてはならないだろう。

しかし、そうでなければ、このままでは、歴史は繰り返してしまふ。

私はまず、この黒島の絆の話を『人の思い』として伝えたいのだ。そして更に、今こそ、親たち世代の『人の思い』を伝えていきたいのだ。それはもう、今しか出来ないことだ。多分、これが私の仕事だし、私はそれなら少しは自信がある。

鹿児島から黒島に向かう定期船の船上で、元特攻隊員の方が話された言葉が、まだ耳に残っている。

「まだこの海の底にも、家族の元に帰りたいと願っている人が、何人も眠っているはずですよ。そして、誰かが迎えに来てくれないと、あの人たちはお母さんの胸には帰れないんです。日

本人なら、それを忘れないで、拜んで欲しい。そうして、あの人たちを海の底から、故郷の家族の元に帰してやって欲しいんです・・・」

取材中、何回も行き来した海だったのだが、そんなことすら、言われなければ分からなかった自分が恥ずかしかつた。でも、それを教えてもらった今は、出来るだけ多くの人に、この言葉、思いを伝えたいと思っている。

私には、ある小説を読んだから、同じように忘れられなくなつてしまった風景がある。それは、深夜の東京駅、人が誰もいなくなると、無人の列車が到着するホームがあり、遠く南方からの戦死者の霊が、毎晩帰還しているイメージだ。

それは、とても悲しい風景として記憶していたのだが、今は、それすら救いに感じている。何故ならば、たとえ一人でも、その列車が東京駅に着いていることを忘れないでいる間は、その列車は毎晩運行され、まだ帰れる人がいるのだと思うからだ。

しかし、それを全ての人が忘れたとき、二度と帰れなくなってしまう人がいるのだ。

今、これを書いている平成十七年は、年が明けた途端に、政界、財界、教育界、様々な場面で日本のモラルハザー

ドが問題化し始めた。あの戦争から六十年を経た、我が国の有り様が、今、問われているのだと思う。

私は、そんな渦中にある東京から、遠く海に浮かぶ黒島に想いを馳せている。益々弱者に厳しくなる世相の中で、黒島はそれでも頑張つて、日本という国を支えてくれている。

それは、あの時代もそうだった。そして、その絆は今でも、関わった人たちの中で生き続けているのだ。

黒島の絆の一端を担っている元特攻隊員の中で、安部正也少尉は、未だ消息がはっきりしていない。

家族を思い、国を憂い、戦友を案じていた安部少尉。だからこそ、私は常に安部少尉のことを思い出す。そして、私は今、彼のことを、分かっている限りのことを書ければと思っている。

「安部少尉、あなたは今、どこにいらっしゃいますか？」

この作品は、番組取材時のメモを元にして書かれた現代と、当時の黒島の出来事が並列して書かれている。

現代の部分は事実であり、ノンフィクションだが、あの当時の部分はフィクションとして読んでいただきたいと思う。何故ならば、そこには、私が伝えたい真実の『人の思い』があるからだ。

**栃木県護国神社
「特攻勇士之像」奉納除幕式
に参列して**

理事長 藤田 幸生

我が教会が全国の護国神社に奉納しようとしている「特攻勇士之像」が、この度、栃木県護国神社に建立された。九体目である。その除幕式が、去る8月15日午前9時から行われた。私は、協会代表として参列し、祝辞を述べた。除幕式は、暑い夏の朝、終戦記念日慰霊祭に先立ち、「栃木県特攻慰霊顕彰会」(会長 稲 寿護国神社宮司)の皆さんの力で、整齊と厳かに実施された。偕行社、海交会の各代表、栃木県下の募金協力団体である自衛隊栃木地方協力本部を始め、防衛協会、隊友会、郷友会、自衛隊父兄会、遺族会、傷痍軍人会、軍恩連盟、神社庁、日本会議の栃木県支部等の代表、及び各議員の皆様がそれぞれ出席されていた。協会からの祝辞で、私は「平成19年から全国の護国神社等に奉納しておりますこの像は、陸海軍の航空、回天、震洋、レ、空挺、桜花など全特攻隊員の服装の一部分を取り入れた容姿となっております。

護国神社の境内を訪れる人は、この

像を目にして、特攻隊員のことに関心を致してくれることでしょう。心惹かれて、残されている遺書や歴史等を探究し、実際に何が起きたかを知るようになること、おのずから彼らに対して感謝の気持ちが起こつてくることでしょう。今この世にある自分自身の存在と幸せを省み、日々の生き方を考えてくれることを期待したいと思います。そして更に、現在の日本及び日本人の在り方を考えるきっかけにしてほしいと切に願うものであります。そのことが、身をもって国難に殉じた若き特攻隊員達の御霊の慰霊になると信じるからであります」と、その気持ちを伝えました。

また、日本会議の三好達会長から、以下の祝電が届けられた。

「本日、「特攻勇士之像」の除幕式が、関係各位のご尽力により開催されましたことを心よりお祝い申し上げます。大東亜戦争終結より65年、祖国同胞のため、一命を捧げられた英霊、わけでも生還を期さない特攻作戦に身を投じられました尊い御霊のお姿を、国民の多くは忘れ去っているかに思えます。

今日の我が国が、先人の血と汗の上にごそあることを、とりわけ次代を担う若い世代に伝え継いでいくために、

『特攻勇士之像』が栃木県護国神社の地に建立されましたことは、誠に意義深いことと存じます。貴会の英霊顕彰事業が、今後益々発展されますことを、心より祈念申し上げます。」

この「特攻勇士之像」奉納事業が、今後とも円滑に推進できるよう、各地の護国神社関係者の皆様のご支援ご協力をお願い申し上げます。

○「特攻勇士之像」除幕式

日時 平成22年8月15日9時～40分
場所 栃木県護国神社境内

式次第

- 一 国歌斉唱
- 二 除幕
- 三 神事
- 四 碑文奉納
- 五 主催者代表挨拶
- 六 来賓お言葉
- 七 来賓紹介
- 八 「慰霊の歌」奉納

○「特攻勇士之像顕彰碑文」

私たちは決して忘れない
かつて太平洋戦争の末期 敵の圧倒的戦力を阻止しようと爆弾をかかえあるいは魚雷を抱いて敵艦等に体当たりを敢行した特攻隊員のことを
祖国の安泰を信じ 太平洋の陸に

海に空に散華した特攻隊員は 全国で実に五千八百余柱 本県で九十四柱に及ぶ

このたび 特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会寄贈の「特攻勇士之像」を多くの県民の浄財によつてここに顕彰碑として建立することができた
特攻隊員の崇高な美挙が この碑によつて永遠に語り継がれることを願うものである

平成二十二年八月十五日

栃木県特攻慰霊顕彰の会



アヘン戦争

田中 賢一

アヘンの蔓延

アヘンは薬品として早くから中国に入っていたが、それが普及したのは、イギリスの対中国貿易による。清朝末期、イギリスは中国から生活必需品の茶を輸入していた。これに対し、綿製品を輸出しようとしたが、余り買ってもらえず、イギリスにとって輸入超過になっていった。そこで印度産のアヘンを持ち込んだ。「アヘンを飲めば、細く長く生きられる」と宣伝し、中国は大量のアヘン買い付け国となった。貿易決済は銀で行われるので、中国からどんどん銀が流出した。

当時の税制は銀本位だが、納税者である庶民が持っているのは銅銭である。仮に税額が銀一両とした場合、銅銭七百文か八百文という時代が長く続いていたが、銀の流出が増えるに伴い、銀一両が千文、千二百文、千四百文とうなぎのぼりに上がっていった。庶民にとっては大増税で、納税出来ない者は流民となる。

銀の流出をよそに、アヘンの輸入は年々増え続けた。

嘉慶20年(1817) 三六九八箱
道光元年(1821) 四七七〇箱

道光5年(1825) 九〇六六箱
道光9年(1829) 一四三三八箱
道光13年(1833) 二一六九五箱
道光18年(1838) 二八三〇七箱
別の資料によれば、道光15年に三万箱を超え、道光18年には四万箱を超えていたという。要するに正規の輸入でなく密輸を含んだ数と思う。

そのアヘンが人々を蝕むことは実に甚だしい。先ず、役人がそれに染まった。それも高級官僚ほど甚だしい。龔自珍という詩人がいた。初めは官に就いていたが、後に官を離れた憂国の詩人である。「己亥雜詩」という詩集を残した。

己亥雜詩 其の八十五

津梁の条約 南東に遍し
誰か春を蔵する深塙に逢わ遣むる
枉かず 人の蓮幕の客と呼ぶに
碧紗の幬は護る 阿芙蓉

(注) 津梁の条約 開港の条約。
深塙 塙は中が空洞になっている
築山で秘密の所。蓮幕の客 高級
役人。碧紗の幬 碧い絹のとばり、
アヘン吸飲のベッドを囲う幕。阿芙蓉 阿ヘンの別名。

貿易条約が結ばれ、中国の東南の地は至る所開港となった。春の樂事を秘める深い洞窟に巡り逢うようになったお偉方が「蓮幕の客」と呼ばれるよう

になったのも理由のないことではない。青緑のとばりがアヘンを大事に取り囲んでいるからだ。北京の清朝ではアヘンの取引を禁じたが、現地の役人は賄賂を取り、一向に取り締まらないばかりか、自分自身がアヘンの虜になっている。

己亥雜詩 其の八十七

鬼灯 隊隊として秋螢散じ
落魄の參軍 涙眼笑る
何ぞ専城の花県に去かざる
春眠 寒食して未だ曾て醒めず

鬼火のような燈火が秋の螢を飛び散らせたように光る。魂の抜けた役人の目は涙で光っている。どうして勤めている役所に行かないのか、春の眠りをむさぼり飯も食わず、まだ醒めないのか。

林則徐登場

現地がこのような有様と知って道光帝は、強骨漢林則徐を登用し、欽差大臣として全権を与えた。道光18年11月のことである。その頃龔自珍は次の詩をものしている。

己亥雜詩 其の百二十五

九州の正氣 風雷を恃む
万馬齊しく音す 究に哀しむべし
我は勸む 天公重ねて抖擻し
一格に拘せず人材を降さんことを

林則徐のような人材を待望する詩で

ある。現地で彼は私設秘書のような仕事に就く。

林則徐は現地に乗り込むやイギリス人にストックしているアヘンを全部出せと申し渡した。彼らは今までの役人にしたように、賄賂によつて事を解決しようとしたが、それは通用しないと知るや、申し訳に一部出した。林則徐は船上に多量に持っているのを知っていたので、それを出すまでは容赦しないと、夷人館を包圍し糧道を断つた。彼らはそれには参つて2万箱全部を供出した。林則徐はそれを北京に運ぼうとしたが、君側の佞官が林則徐に名を成さしめるのを妬み、現地で処分せよと命じてきた。

アヘンの性質を調べてみると、その最も忌むのは塩と石灰であると判った。そこで林則徐は虎門鎮口海浜のや高いところに二つの池を掘らせた。縦横十五丈尺余というから、約50米四方の人口池だった。アヘンが浸透するのを防ぐために、四圍には板を打ち付け、底に石を敷いた。海に面した方に水門を造り、その反対側に溝道を掘った。先ず、後ろの溝道から水を池の中に導入し、大量の塩を投入し、箱から取り出した球形のアヘンの塊を四つに切つて塩水の池に落とし込む。

このようにしてアヘンを半日ほど塩

水に浸しておく。それから消石灰の塊を次々に投入すると、次第に煙を上げて沸騰するように見える。人口池の上には板を架け渡し、大勢の夫夫がその上に乗り長い棒でかき混ぜ、アヘンのかけらを早く溶解させるようにした。そして、引き潮の頃を見計らって海岸側の水門を開け、海中に放出する。その後水で池の四囲の板や底を洗い清め、アヘンの滓が溜らないようにする。二つの池で代わる代わるこんな方法で処分を行った。大量のアヘンなので旧曆4月22日に作業を開始し、5月15日まで掛かった。北京から高級役人が来て立ち会った。

戦争勃発

夷人館に在って糧道を断たれてイギリス人達は、船上生活を余儀なくされた。しかし海岸でも食糧は得られなかった。林則徐が沿岸住民にイギリス人に対し食糧を売ることを禁じたからである。困り果てたイギリス人は、28門の大砲を搭載している軍艦がマカオに來ているので、これで中国の兵船を攻撃して撃滅した。当時マカオは、所属は未定だが、ポルトガル人の居住地になっていた。イギリス軍は食糧入手のための行動だと釈明し、それからは食糧を売りに來る船の行動を見逃すことになった。その後、珠江湾の川鼻沖

で両国の兵船の会戦があったが、ここでもイギリス側が勝ちを制した。この時林則徐は罷免された。アヘン没収で損害を受けた商人達に本国に帰り訴えた。自分達のことは棚に上げ、イギリスの女王が侮辱されていると声高く叫んだ。1840年2月英国議会は遠征軍の派遣を承認した。その編成は、次のとおり膨大なものであった。

旗艦ウエルズリー	搭載砲	七四門
コンウエイ		二八門
アリゲーター		二八門
クルーザー		一八門
アルジェリン		一〇門
東印度会社武装船		四隻
これ以外に		
英本国から	二隻	
ケープタウンから	二隻	
更に英本国から	二隻	

これに対する中国の海軍は無きに等しい。そればかりではない。北京から派遣された老将の楊芳の如きは、英軍の砲撃が神の如く正確であると聞く

と、それに対抗する術を占い師に相談した。占い師が答えた。「外夷妖邪の術が最も忌むのは婦人の尿であります。したがって敵に勝つには、婦人の尿桶を敵に向け蓋を取れば、妖術は忽ち破れるであります」と答えた。楊芳が一番に出した命令は、婦人の尿桶を集めよ、だった。林則徐は5月1日、浙江省の軍營で

服務せよという命令を受けて、広州を去った。5月24日はビクトリア女王の誕生日で、イギリスはこの日に攻撃を開始した。上陸して広州に侵入したが、清の軍隊はその前に内紛を起こしており、すぐに四散し、英軍は乱暴狼藉を極めた。ここで和議が成立し、「広州和約」が結ばれた。それは賠償金六百万弗を支払うことなどを含め、無条件降伏だった。

英軍は外洋に出て北上し、アモイで台風を避け、9月26日舟山沖に出た。そこから乍浦城を攻撃し、そこでまたもや狼藉を極め、婦女暴行が甚だしかった。英軍は転じて呉淞要塞を陥とし、長江を遡航して鎮江に乱入した。その時の有様を「出圍城記」に次のように述べている。「夷鬼來たれば、忽ち婦女の屍道上に滿つ。髪をみだしすべて赤裸。死なざるものは擁抱されて去る。生死離散視るに忍びず」と。

鎮江が陥落して道光帝も和を請い、1842年8月29日に南京条約を結んだ。これによって香港島がイギリス領となり、広東、厦門、福州、寧波、上海が開港場となり、清国は没収したアヘン代金六百万弗、遠征費用千二百万弗の支払いを約束させられた。

香港はこの戦争の結果、大東亜戦争で我が国が攻略するまで英領だった。

アヘン戦争と我が国

アヘン戦争が勃発したのが1840年、我が天保11年、仁孝天皇の時代、徳川は十二代家慶で、国内はよく治まっていた。鎮国中ではあったが清国の商人がアヘン戦争の勃発を伝えた。林則徐は広州を去るに当たり、宜南詩社(龔自珍等の属していた詩社)の魏源に資料を託したので、魏源は「海国図志」という一書を出した。この本が嘉永3年(1850)に唐船によって長崎に伝えられ、平戸藩の家老葉山高行が持っており、吉田松陰も平戸來遊の際閲読したという。松陰が下田でペリーの黒船に乗せてもらい密航しようとしたのも、この本に触発されたのではないか。幕末識者の外国事情の知識はこの本によるところが多い。

ところで、イギリス人が日本にアヘンを売り込もうとしたらどうなるか。国内は清と違い封建制で、藩主の威令は庶民に徹底しており、アヘンが蔓延することなど考えられない。また、アヘン戦争で英軍が繰り出したような艦隊が、日本に押し寄せて来たらどうなるか。四国艦隊が下関を砲撃したように大損害を受けるであろうが、上陸して陸戦となれば彼等に勝ち目は無い。清軍と日本の武士とは違い過ぎる。ありもしない事を考えてみただけのことである。

特攻観音に鎮座まします 空挺関係の御霊に捧ぐ

田中 賢一

従来空挺特攻は義烈空挺隊だけを祀ってあったが、菅原道照副会長の御尽力でレイテ空挺作戦で特攻として出

撃させておきながら、四航軍の怠慢で手続を怠り、特攻とされなかった英霊も観音にお祀りされた。それらの人中には、私にとって畏友熟知の人が少なくない。今回の年次法要に私は歩行不能で参加できないので、腰折れ三首を捧げてお詫びとした。

語りでもなお語りでも尽きざるは
国に捧げますらをの友

続くものありと思えばひたすらに
もののふの道駆けしともがき

星移りさま替わりたる今の世に
伝うることぞ我がつとめなれ

レイテ空挺特攻の一例

榊原達哉大尉

私との御縁

昭和19年6月から第二挺進団動員ま

で5カ月間、私は陸軍挺進練習部の下士官候補者隊長をしていた。その時、榊原中尉は、四聯隊から出ていた区隊長として私の指揮下にあった。彼は直情径行、性質は激しいが教育には情熱が籠っており、候補者の人望は篤かった。

小丸川訓練事故

1年前のことになるが、聯隊長特命で新たに所属になった将校の実兵指揮訓練を担当したとき、小丸川（高鍋町の北を流れている川）を徒渉する場面があった。勿論事前に自ら徒渉して安全を確認してあったが、当日山間部に大雨が降ったらしく増水しており、演習小隊長以下8名が流されて行方不明になってしまった。聯隊から救援部隊が駆け付けてから榊原は軍刀で自決しようとしたが、そのようなことを予期

して聯隊長が付けておいた者に取り押さえられて、戦場に出れば死ぬべき時は幾らでもあると言われ、その時は思いつまなかった。私は当時千葉戦車学校の学生でこの事故の話は聞いていたが、深くも思い至らず、私の下にあった時、彼の心の中に立ち入った指導もなかったのは、今にして思えば心残りである。

レイテ作戦参加

敵がレイテに上陸したのは19年10月

20日である。この4日後の24日に挺進第三聯隊に動員下令、次いで数日遅れて第二挺進団司令部、挺進第四聯隊、挺進飛行第一戦隊と次々に動員が下令された。私は司令部の部員に内定していたが、故あって残された。

団司令部と三聯隊は、11月14日ルソン島アンフェルスに集結した。与えられた任務は、レイテ島ブラウエン地区の飛行場群を奪取し、脊梁山脈を越えて進出する二十六師団と合流し、第三十五軍の攻勢の地歩を獲得するにあった。

挺進団としては、飛行戦隊は台湾で待機しているが、第四聯隊の到着が遅れているので、第三聯隊だけでブラウエン地区の三つの飛行場を奪取する考えだった。ところが、第四聯隊が到着し飛行戦隊も3個中隊だったのが、新田原で錬成中の第二戦隊から1個中隊（三浦中隊）が増派されることになった。第四聯隊長斎田少佐は自分の聯隊からも一部でよいから第一次挺進に加えてくれと強く要望した。

その頃ルソン島からレイテに向かう増援部隊や補給品を運ぶ輸送船が、敵航空の攻撃で損害極めて多く、戦力が枯渇する恐れ甚大だった。ブラウエンの3飛行場攻撃は、敵航空を押さえる意味も大きかった。新たに到着した第

四聯隊の中隊長連中は、この話を聞くと、敵航空の活動を封ずるならば、ブラウエンだけでなくレイテ湾沿いのドラグとタクロバン両飛行場も降下の目標にすべきである。自分の中隊にやらせてくれと言いつ出した。たとえ二十六師団がブラウエンに進出して来ても、レイテ湾岸まで進攻出来るとは思えない。したがって、そこに降下する部隊は特攻隊である。

さて主題の榊原のことだが、彼は出動時は二中队の小隊長だったが、五十五期は大尉に進級したので本部付になっていた。レイテ湾岸のドラグとタクロバンも降下目標にせよと言う張本人だった。挺進団長徳永大佐は、下からも盛り上がる勢いに押され、新たに2目標の追加を第四航空軍に具申し、そのような決定をみた。タクロバンは港で有り、上陸した敵軍の兵站基地になっており、敵占領地域の奥深いところに在る。榊原はタクロバン降下部隊の指揮官を志願し、その部隊はどうして人選したのか伝わっていないが、配当された輸送機は2機である。榊原が小丸川で殉職した8人の位牌を抱いて飛行機に乗り込む姿が伝わっているだけで、その後のことは全く判らない。

レイテ空挺作戦の思い出

田中 賢一

時は昭和19年10月、66年前、第二挺

進団に動員が下令された。私は、陸軍挺進部隊に初頭から終戦まで所属し、第一回の出勤の時は、団司令部員としてパレンバン作戦にも参画したが、どういふわけか、自分が参加しなかったレイテ作戦の方が思い出が深い。戦死した聯隊長や中隊長は皆親しい間柄だったためか、戦後二回も現地踏査した故か、あの人達の姿は生涯脳裏から消えることはない。

「語りてもなお語りても尽きざるは

国に殉ぜしますらをの友」
動員下令

昭和19年10月24日、その頃私は、陸軍挺進練習部の下士官候補者教育部の隊長をしていた。昼頃だったと記憶するが、練習部の高級部付の徳永賢二大佐から予備呼出しがあつて、挺進第三聯隊に動員が下令されたことを知った。レイテに敵が上陸したのは4日前の20日である。来るものが来たと思つた。挺進第四聯隊と挺進飛行戦隊にも引き続き動員がかかることは分かっていた。

挺進練習部は宮崎県児湯郡川南村豊

原にあり、下士官候補者隊も同じ営内にあり、挺進第三と第四聯隊は少し離れた新茶屋という部落に在った。飛行戦隊は十数キロ南の新田原飛行場に在った。

聯隊や飛行戦隊はそのまま戦時編制になるが、挺進団司令部は練習部で新たに編成しなければならぬ。ただし将校は、動員計画で戦時命課と称し、決まっていた。団長は徳永大佐、私は部員となっていた。

佐世保の思い出

第三聯隊は空母で佐世保から比島に行くという指示が、大本営からあつたので、私はその晩の夜行列車で佐世保に行った。鎮守府に向き、空母は隼鷹で明日入港と知った。次いで重砲兵聯隊に行き、聯隊が到着したら一晩泊めてもらうことの打ち合わせを済ませ、聯隊長や中隊長等の宿泊する旅館を設営した。それだけ済ますと日没になり、停車場司令部に連絡すると、今軍用列車が到着したという。全て順調に仕事をこなすことが出来た。

私は挺身部隊在隊間、敵地に降下する等の、華々しい戦闘行動をしたことはなく、弾丸の下をくぐることも遂になかったが、この日のような忙しい思いをしたことは度々あつた。第一回に戦地に出た時は、司令部の兵站担当の

幕僚だったので、第一聯隊の海難に伴う複雑な業務に寧日のないなかつたことなど、忘れ難い。

さてこの晩は、聯隊長等のために設営した旅館の灯火管制のほの暗い伝統の下で杯を交わした。集まった者は、聯隊長白井恒春少佐(42期)、聯隊付土屋茂少佐(50期)、副官河野寿大尉(特志)、中隊長(番号順)松下兼道、桂善彦、大城隆、蓬田正之(以上54期)、重火器中隊長久富薫大尉(準52期)私を入れて9名だった。特に気負うことなく、悲壮感もなく、寛いだときを過ごした。皆私にとって親しい間柄であつた。思えばこの人達、大城以外全部戦死してしまつた。大城はルソン島で戦い負傷し、生還したが、戦後交通事故で死亡した。

白井聯隊長は高鍋の借家が隣で、毎朝声を掛け合つて通勤バスの乗り場まで行つていた。

「司令部は飛行機で行くので先に着くでしょう、何か奥さんに伝えることがありますか」と言つたら、「何もない、こんなに沢山もらつたからやるよ」と言つて鵬翼を10個ほどくれた。

翌日は乗艦するというので私は埠頭で見送つた。私の前を通る時懐かし気に敬礼をする者がいるので、見れば下士候隊にいた兵だった。俺も後から行

くからなと声を掛けた。私は出港まで見送ることなく鉄道で帰隊した。

意外 部員の交代

帰つて徳永大佐に復命すると突然、「稲本が帰つてきたので部員を譲れ」と言われる。団司令部の動員は下令されたが、まだ完結していない。聞けば挺進第三聯隊にいて昨年航空士官学校に転属した稲本少佐が、この度挺進練習部付になって戻つて来たという。彼は「田中は以前部員として作戦に参加したのでから今度は自分の番だ」と徳永大佐に強引に食い下がつたといふことだつた。

稲本宏は挺進第三聯隊が昭和17年初めに創設された時、練習員課程を修了し聯隊の所屬となり、一年半ばかり聯隊本部で勤務した。第三聯隊は挺進部隊における彼原隊と言ふべきである。それに今度少佐になって戻つて来た。編制表では私の就くべき部員は少佐になつてゐる。私は52期でまた大尉、彼は51期で既に少佐、徳永団長も交代させざるを得なかつたのだらう。数日後新田原を發つ団司令部が分乗した輸送機を私は見送る羽目になつた。

レイテ地上決戦

稲本少佐の話が出たついでに少々後日のことを話すことにする。その前に団司令部の編制について述べれば、部

員は3人、副官1人、部付3人となっていた。3人の部員は内部の呼び名だが、高級部員、甲部員、乙部員と称していた。この時の顔ぶれは、高級部員は弘中郁夫少佐、甲部員が稲本少佐、乙部員が尾畑耕平大尉だった。弘中少佐は航空で操縦者だったので空中機動の調整等を担当した。なお徳永団長も航空で操縦者だったので、降下部隊の軍隊区分等団で決めることは歩兵出身の稲本の担当となった。尾畑大尉は騎兵の出身で稲本を補助していたらしい。団司令部は11月11日マニラに着き、前日同地に到着していた第三聯隊を掌握し、第四航空軍の指揮下に入った。団司令部と第三聯隊はアンフェルス飛行場に隣接している南サンフェルナンゴの宿舎に入った。第四聯隊は輸送船で比島に向かいつつあり、挺進飛行第一戦隊は台湾の嘉義で待機していた。

比島方面に敵を迎え撃つ捷一号作戦では、ルソン島以外に敵の侵攻があった時は海空の決戦は随所に行うが、地上の決戦はルソン島以外では行わないと計画されていた。レイテに敵の上陸を見るや、大本営陸軍部は台湾沖航空戦の戦果を過信し、レイテにおいても地上決戦を行うことを命じた。

比島全部を担当している第十四方面軍では、ビザヤ地区担当の第三十五軍

に、レイテにおける地上決戦を命じた。しかしレイテには第十六師団1個師団だけしか配置されていない。セブに在る第三十五軍司令部は一部兵力をレイテに注ぎ込み、軍司令部もレイテに進出した。レイテ湾に上陸した敵は、敵側の放送によれば4個師団、タクロバン平地は忽ち敵に席捲されてしまった。これに対し方面軍は第一師団、第二十六師団、第六十八旅団及び多くの軍需品を送り込んだ。しかし敵の航空攻撃で海没するものが少なくなかった。方面軍では二十六師団を派遣する時、この師団を脊梁山脈を越えてプラウエンに進出し、タクロバン平地で決戦を行うという、地形も彼我戦力も無視した案を示して実施を求め、挺進団にプラウエンに挺進させようとした。これに対し団では現在レイテの戦況はどうなっているのか、方面軍司令部に外向いて尋ねても全く掌握していない。四航空軍はプラウエン飛行場に敵がいるのか、これまた知っていない。こんなことでは降下戦闘の計画を立てようもない。

稲本部員の行動

稲本少佐は自分が第三十五軍司令部に行き戦況と地形を確かめ、挺進作戦を如何に行うべきか意見具申すると申し出た。初め徳永団長は稲本の派遣を承

知しなかったが、上級司令部の余りの頼りなさに、稲本の派遣を命じた。それが何日なのか分かっていない。それと如何なる方法でレイテまで行ったのか。戦後私は弘中さんに尋ねたが覚えていないという。稲本のことだから飛行機を出してもらい、レイテに降下しようと思望だが、弘中さんは飛行機を出したことはないと言った。弘中さんは既に故人だが、私はこの人から随分史実を聞き出している。

そうなるのと輸送船に便乗して行ったのだろうが、オルモックに着いた時は既に遅かった。プラウエンに向かう空挺作戦は12月6日開始されたが、第二次降下は天候悪化のため進入出来ず、翌日は背後のイビルに敵の大軍が上陸して来たので、プラウエンに向かう空挺作戦は取り止めになった。

その後控置してあった第四聯隊を使うオルモック救援作戦が行われたが、この作戦は8日、10日、11日、12日、13日、14日と残り少ない輸送機を使い毎回百名足らずの者をバレンシヤに降下させ第三十五軍の増援部隊とした。1回目の時は稲本の姿はなかったが、2回目からは降下場に来ていて状況を説明し命令を伝えた。

稲本少佐の戦死

第三十五軍司令官鈴木宗作中将は、

方面軍の指示に忠実に脊梁山脈越えにプラウエンに進出する第二十六師団の後方を西進していたので、オルモックには友近参謀長が留守を守っていた。手持ち兵力は殆どないので、イビルから北上して来た敵に難なく奪われ、急遽第一線から引き抜いた今堀支隊や挺進第四聯隊がオルモック北方地区で懸命に防戦しており、軍司令官は辛うじてファトンの司令部に辿り着いた。

12月16日今堀支隊等の陣地は遂に敗れ、敵は3縦隊になってバレンシヤ方面に突進したが、その一部が17日ファトンの軍司令部を急襲した。この時稲本少佐は司令部の衛兵を指揮して戦い戦死してしまった。軍司令官や参謀長達はその隙に東方の山地に逃れることが出来た。渡辺利亥参謀は戦後私に述べ懐した「あの時我々は稲本少佐のお陰で通れることが出来たのだ。司令部の幕僚でもないのに偉い人だった」と。彼ならばこそ、この拳に出たのだと私は思っている。私は戦後2回彼の地を訪れたが、香華を供え語り掛けた「稲本さんよ、俺を押し退けて部員になったのも何か因縁があったのかな」と。レイテ空挺戦については、まだ後世に伝えたいことが沢山あるが次号に。

山本卓美勤皇隊長・二瓶秀典同副隊長の母校仙台陸軍幼年学校訣別訪問飛行

副会長 菅原 道熙

昭和19年12月1日、当時筆者は仙台陸軍幼年学校(以下「仙幼」と略称)46期生で、3年に在学していた。この日、福島県原ノ町飛行場から比島へ出発することになった、勤皇隊長山本卓美中尉(仙幼41期・陸士56期)と同副隊長二瓶秀典少尉(仙幼42期・陸士57期)から出発前の寸暇を割いて母校への訣別訪問飛行を行うとの連絡が前日に入り、学校当局から、当該時刻には全校授業を中断して、学舎の廊下から来訪機を迎えるように、との指示があった。

当時、午前8〜12時の間に各10分の休憩を挟んでの4時限の授業が組まれていた。はつきり覚えていないが、訪問は2〜3時限の頃であったと思う。生徒舎と学舎は、渡り廊下で東西に繋がっていて、学年別に南北に3棟が並んで建てられていた。筆者は第二学班でその時は北側の第三学舎2階の教室で授業を受けていた。北方から進入して来る飛行機を迎えるのは、最適の場所であった。

北方数百米の所には、今ではすっかり住宅街になってしまった八木山が東西に連なっているが、当時は全山樹木に覆われていた。

窓から身を乗り出して待つこと暫し、八木山上空に姿を現した2機の二式双発襲撃機(二式双発複座戦闘機「屠龍」の改造機種)は、編隊で見える見る高度を下げて、学舎の上すれすれの超低空で轟音と共に飛び越えていった。空は紺碧の青空ではなかったと記憶する。2回目、そして3回目には、大きく機体を左右に振りながら突っ込んで来た。

我々は夢中で手を振り、声を限りに叫んだ。間もなく爆音は南の空に消えていった。暫しの静寂が訪れ、万感胸に迫るものを覚えつつ、全員無言のまま教室に戻った。今でもその時、収納された引つ込み脚が翼下にはつきりと見えた光景が眼前に浮かんで来る。

勤皇隊は、11月16日に、茨城県銚田飛行場で編成された(12名・12機)。当日は、合わせて6隊が各地で編成されている。勤皇隊は原ノ町飛行場に移動し、訓練を重ねて12月1日にルソン島リパ飛行場に向けて出発という慌ただしさであった。

途中、発動機の不調等整備に手間取り、リパ飛行場到着は何日か遅れて12

月7日、隊長、副隊長以下9機がレイテ島オルモック湾の、続く3機は12月10日、レイテ湾の敵艦船にそれぞれ突入し、散華された。

初期の比島における特攻で、勤皇隊は、分散することが最も少なく(2回に分かれた)、しかも隊員全員が突入していることは、注目されるべきであろう。

リパ飛行場通信班員であった少飛12期生の林 長守伍長(朝鮮忠清南道出身)は、勤皇隊員中6名が少飛13期生であることを知って、自分も特攻隊員として同行させてもらいたいと強く訴え、その熱意もだし難く、山本隊長は遂に林伍長の願いを受け入れて、隊長機に同乗させて出撃した(注・当然のことではあるが、山本隊長は、第四航空軍の了承を得た上で、決断されたであろう)。12月7日の勤皇隊は、9機突入で戦死者が10名になっていることは、この事に由来している。誠に心打たれることである。

因みに、仙幼出身の特攻戦没者は、41期生2名、42期生12名である。大東亜戦争中、その他の戦没者は41期生45名(航空13名、地上32名)、特攻を含めて47名、損耗率31%、42期生は27名(航空4名、地上23名)、特攻を含めて35名、損耗率20%である。

この資料を纏めながら、青年将校として勇躍戦場に赴いて散華された先輩を思い、身につまされること、大なるものがあつた。

ところで、山本先輩は、我々が仙幼に入校して間もない昭和17年の晩春の頃、任官後間もない新品少尉として、数人の同期生と共に三神峯(仙幼は史蹟のある三神峯台上に建てられた)を訪問されている。

このことは、筆者と同学班に、東京高等師範学校(現筑波大学)付属中学校出身者がいて、彼の言によると、その時山本少尉に指名されて、夕闇迫る三神峯台上で暫し歓談したという。母校、そして、同窓という間柄を重視された山本先輩の人となり浮かんでくる。

山本、二瓶両先輩は、母校仙幼を心から愛して、祖国を去るに当たり、訣別飛行を実行して、思い残すことなく莞爾として征途に就かれたのである。最後に勤皇隊13烈士の氏名を掲げ、心から感謝・追悼の誠を捧げ、御霊安かれと祈念申し上げる。

- 隊長 山本 卓美中尉 陸士56期
- 副隊長 二瓶 秀典少尉 陸士57期
- 東 直次郎少尉 陸士57期
- 林 長守伍長 少飛12期
- 入江 真澄伍長 少飛13期



故 二瓶 秀典大尉 (陸士57期)
【昭和19年12月7日・比島戦死】



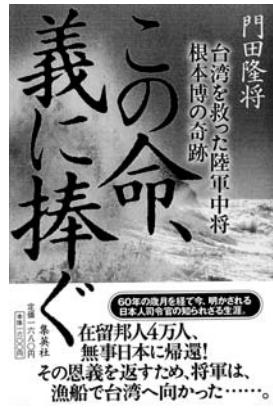
故 山本 卓美少佐 (陸士56期)
【昭和19年12月7日・比島戦死】

八紘八隊勳皇隊長

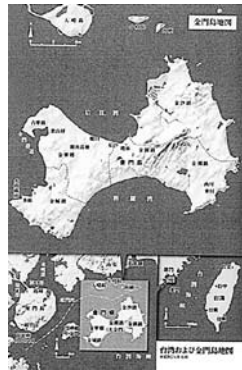
- | | |
|---------|----------|
| 大村 秀一伍長 | 少飛13期 |
| 片野 茂伍長 | 少飛13期 |
| 白岩 二郎伍長 | 少飛13期 |
| 増田 良治伍長 | 少飛13期 |
| 勝又 満伍長 | 航養仙台 10期 |
| 湯澤 豊曹長 | 操学87期 |
| 北井正之佐軍曹 | 操学91期 |
| 加藤和三郎伍長 | 少飛13期 |

図書紹介

① 門田 隆将 著
『この命、義に捧ぐ』—台湾を救った陸軍中将根本博の奇跡—



駐蒙軍司令官時代の肖像写真、昭和19年11月撮影。



金門島は中国の福建省厦門湾に浮かぶ大小二つの小島である。西に厦門島があり、北の対岸は中国大陸である。その海峡の幅は僅かに四、五キロメートル位しかない。しかも北方海峡の中途に在る大嶼島、小嶼島という二つの小島は中国共産軍の手中にある。だが、現在もなお、その狭い海峡の間が中国と台湾を分かつ国境なのである。一方、東は台湾海峡を隔てて台湾に対しており、その幅は約180キロメートルに及ぶ。今から61年前の1949年10月、この大金門島をめぐる中国共産軍と国民党軍が熾烈な戦いを展開し、遂に共産軍は殲滅された。奇跡とも言うべき国民党軍の大勝

利であり、いわゆる「国共内戦」はこの金門島で決着がついたのである。この金門島戦は、現地では、その主戦闘が繰り広げられた、大金門島内の地名を取って「古寧頭戦役」という。そして、その勝利の戦役の陰に、持てる能力の全部を傾注して指導に当たった日本人がいたことを知る人は少ない。その日本人こそ元駐蒙軍司令官であり、終戦後は北支那方面軍司令官を兼ねた根本博中将である。將軍は終戦時、駐蒙軍司令官として張家口に在ったが、終戦後の昭和20年8月20日、侵入してきたソ連軍から、内蒙古在留の邦人4万名の命を救うため、武装解除

の命令を拒否し、敢然としてソ連軍と激戦を展開した。そのお陰で在留邦人を無事安全な地区へ移動させることができた。その後、国府軍の庇護の下、北支在留邦人と日本軍将兵の帰国を無事に果たすことができたが、そのことに將軍は深い恩義を感じていた。ところが、その直後に始まった国共内戦に、国府軍が敗れ、絶対絶命の危機に陥った時、深く心を痛め、「義には義をもって返す」そのためには命を懸けるとして、数名の同志と共に小舟で難行苦行の末、台湾に密航し、蒋介石總統との再会を果たし、その右腕と言われた湯恩伯將軍と共に金門島防衛戦の戦略を練り、防備を固め、周到な訓練を重ねて、共産軍の来攻に備えたのである。そして、その戦闘に至る経過や戦闘の場面も興味深い、それよりも義のために命を捧げようとした根本將軍の人柄、大和魂に裏打ちされた真に最後の侍とも言える根本將軍の人間性を赤裸々に描き出した力作と言える。しかし、その後の長い年月の経過のうち、政治的、社会的な諸原因により、また、マスコミの心ない報道等により、根本將軍の義挙は、正史の面から消し去られ、世の人々から忘れ去られたかに見えた。ところが、台湾には、少数ながらも、根本將軍の行動と業績

を冷静に分析し、「大義についた人」と高い評価をする学者もいる。また、著者は、そのエピソードの中で、09年10月25日、金門島の大地下講堂で開かれた「古寧頭戦役六十周年記念式典」に、根本將軍らの台湾密航の資金集めや船の手配などに東奔西走し、一行を送り出した後、過労で急死した第七代台湾総督明石元二郎の息子元長の子明石元紹と、根本將軍の通訳兼副官的存在として常に寄り添い、金門島戦にも参加した、吉村是二の長男吉村勝行の二人と共に招かれて出席し、台湾の馬英九總統の演説を聴くと共に、馬總統に面接した著者は、馬總統の表情の中に、二人の日本人への、いやその父親に対する感謝の気持ちが表示されていた、と言っている。中・台の接近を図り、融和を目指す政治路線を採ると言われる馬總統だが、意外にもその演説の中で「われわれはここに眠る兵士に感謝の言葉を述べるだけでなく、ここを、殺戮の戦場から、平和の広場へ変える誓いの言葉を発せずにはいられません。われわれが軍を組織し、戦いに備え、台湾・澎湖・金門・馬祖を守り抜く決意は絶対不変です。兩岸和解の兆しが見られる今、われわれは最大の誠意を尽くし、協議を通じて双方の対立を停止し、殺戮を過去のものと

し、平和をこれからの永遠のものとし、六十年にわたり、古寧頭戦役での大勝は、歴史上の英雄の活躍を伝える詩のように心に染みわたり、広く伝えられ、私たちの心に深く刻み込まれています。彼らが国を守り、人民を庇い、歴史を変えたのです。われわれは英霊に向かい、ここに敬礼いたします」と述べ、孫文の写真の方を振り返って深々と頭を下げたという。

発行所 株式会社集英社〒1001-8050千代田区一ツ橋2-15-10
電話 03-3230-6393
定価 本体1600円+税

② 笹 幸恵著

「白紙召集」で散る―軍属たちのガダルカナル戦記―



著者の笹 幸恵さんは、当協会の理事である。平成18年5月に、「女ひとり玉砕の島を行く」を上梓して、大東

亜戦争の各地戦場で、今なお多くの戦没将兵の遺骨が放置されている実態を、自らの現地探査に基づいて世に問うている（本書は、辛口批評で知られていた故上坂冬子さんから激賞されたという）。

戦争時代は当然のことながら、戦後の苦難、復興の時代も全く知らない若い世代の人々が、大東亜戦争に向かい合っただけのような問題を提起したこと、特筆されることである。その頃協会は、たまたま理事に欠員があったので、協会の目的とするところを後世に正しく伝承していくためには、笹さんは適任者であると考えて、理事就任を願い、快諾を受けた経緯がある。

著者は直接、「全国ソロモン会」に入会を申し込んだ。門外漢として断られると思っていたのが、若い人が関心を持ってくれるのは有り難いことと、喜んで入会を認められたという。かくして、平成17年7月に、著者は初めてガダルカナル島の土を踏んだ。

平成19年8月に出版社から転送された封書には、「ガ島元第十一設営隊に死に損ないの一人」と添え書きされていた。発信者は、静岡県島田市在住の川村辰己氏で、笹さんの著書を読んで、感謝の言葉が述べられていた。

設営隊については殆ど無知であった著者は、軍属として徴用された工具による非戦闘部隊であることを知って、著者の探求心に点火した。川村氏以下のガ島生還者からの直接の聞き取り、日記等から、当事者しか語ることのできない体験談、更にそれらに基づいて公刊戦史その他の資料を丹念に調べ、設営隊を核として、関係した陸海軍部隊の行動、更にはガ島を巡る日米の制空権争奪戦の全貌までを網羅して、本書は、期せずして価値あるガダルカナル戦記書になっている。

（菅原道熙記）

更には、当時の下士官、兵士、軍属の給与の実態比較、あるいは給与食糧の兵士一人一日当たり定量（これが守られなかったが故に「餓島」になった）等、見過ごしやすい情報も折に触れて紹介されていて、著者の冴えた筆の運びに引き込まれて行く。

あらゆる世代の方々には是非一読されることをお勧めする。そして、特に若い世代から「著者の主張に共鳴する」多くの有為の人材が輩出されることを心から願って止まない。

発行日 2010年7月25日
発行所 新潮社〒162-8711
電話 03-3266-5611（編集部）同5111（読者係）
定価 本体1600円+税

終戦の日に拘わる憂憤記

田中 賢一

平成22年8月15日、私は歩行至難のため、靖國神社の参拝は不可能だったが、何とか参列者に渡してもらえないかと思ひ、次の文書を、事前に「英霊にこたえる会」の事務局に届けた。

○宰相菅直人とこれに従う者共の二つの大罪

一、総理大臣は自衛隊の最高統率者ならずや。自衛隊員に、事に臨みては身の危険を顧みずと教えながら、お国のため命を捧げし靖國の御祭神に、一顧だにせざるは、報恩の念持ち合わせなきや。元旦や八月十五日に社頭に額づく庶民の群れを知るや知らずや。御祭神の戦友世を去りし時代となるも、この姿変わらざるべし。靖國神社無き中国や韓国に論ずべし。

二、日韓併合百年に当たり閣議決定の談話。歴史を知らざるか、殊更に歪曲するか。あるとき独立の能力無き韓国を放置せば、ロシア領となりしならん。日本の統治下にありし故に、今日の韓国の繁栄あるを知らしむべし。

ここに支那の故事を示さん。諸葛

孔明より出師の表を奉られし劉禪は、孔明亡き後戦うことなく魏に代わりし司馬昭に降伏し、洛陽に連行され、食邑一万户を与えられ安逸の日々を送りぬ。菅直人よ、汝失脚し韓国に亡命せば、安逸の日々得らるべし。閣議に名を連ねし面々随行しては如何。

○翌日の新聞に見る8月15日の靖國神社

予想どおり、政府要人は一人も参拝しない。庶民の参拝者は約16万6千人で、昨年の15万2千人を上回った。皆若い人である。参道には踏んで歩くように、菅直人や岡田外相の写真が張ってあったという。

16日夕刻、昨日私の分も兼ねて参拝した息子が報告にきた。既に新聞で承知していること以外に、便所に行つたが小便器の中に菅直人の写真が張ってあったので、たつぷり小便をかけてきたという。聞いただけで溜飲が下がった。

爪の垢煎じて飲まず能わずば
きざわしの塵集めて飲まさん
特攻の英霊如何に見給うや
やまと心の失せし徒輩を

唯在るは党利党略 私利私慾
国のゆくすえ絶えて思わず

御報告・『特別攻撃隊全史』掲載の名簿と『特攻観音霊壘簿』記載の内容との照合結果について

副会長 菅原道熙

先般来、当協会発行（平成20年8月15日初版発行）の『特別攻撃隊全史』掲載の名簿と『特攻観音霊壘簿』記載の内容について照合を行つて参りましたが、その結果、世田谷山観音寺・特攻観音堂に合祀されている特攻隊戦没者数は6418柱であることが確認されましたので、御報告申し上げます。

1 陸軍 記

	霊壘簿	今回追記	計
比島航空	255名	15名(イ)	270名
比島挺進(イ)	469名(イ)	4名	473名
南方航空(比島以外)	65名	6名(ハ)	71名
台湾・沖縄	235名	7名	242名
九州・沖縄(ロ)	778名	15名(ニ)	793名
本土・満洲	53名	14名	67名
薫空挺隊		60名(ホ)	54名(ホ)
海上挺進レ	188名	77名	265名
戦車(比島)		9名	9名
計	2043名	207名	2244名

(イ) 全史に収録されていない高千穂降下部隊が、霊壘簿には、昭和31年作成時に既に記載されていた。

① 469名中、薫空挺隊(61名)で、12名を占めた日本人将兵のうち、6名と空挺隊の空輸に当たり、強行着陸後は空挺隊と運命を共にした飛行第208戦隊員7名が含まれている。(全8名)記載されていない1名は今回、比島航空の部に追記した。

② 高千穂降下部隊員460名の氏名は、追補版に収載して公告すべく準備中

二 山本 健雄 一 市来 芳郎
 一 梅田 光明 一 大塚 喜衛
 一 柏 壽 一 河島 慶明
 一 坂上 公成 一 津田 治男
 一 山口 宗之

御芳志誠に有り難うございました。

◆ ◆ ◆
新入会員名簿 (敬称略)

(平成22年7月1日～9月30日)

山形県 玉木 葉子
 茨城県 菊池 宏之
 埼玉県 越後谷大藏 奥村 俊仁
 東 武志

東京都 荒木 紫帆 細谷 清
 齊藤 俊介 市川 博樹

神奈川県 奈美木映里 大友 英明
 丸井 容子 新倉 久男

山梨県 畑山 和彦
 福井県 久末 吉美 後藤 秀和
 京都府 石本登志夫

◆ ◆ ◆
会員訃報 (敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

北海道 高松 績匡 (22・7)
 宮城県 佐藤 胞治 (22・7・25)
 埼玉県 飛澤 裕 (21・11・24)
 千葉県 崎山 忠作
 東京都 赤木千之助 (22・3・9)
 三本松和俊 (20・7・5)
 田中市郎衛門 (22・7・27)
 中村 悌次 (22・7・23)
 村岡 高昭 (22・6・9)

神奈川県 井上 望 (22・4・21)
 福井県 中島 昭二 (21・10・24)
 静岡県 江藤 敏夫 (22・6・5)
 兵庫県 本田 毅 (21・10・21)
 廣島県 濁川 輝夫 (21・3・29)
 香川県 伊藤 利一 (22・6・6)
 鹿児島県 小玉 政幸 (22・6・17)
 吉峰 泰夫
 鹿兒島県 二間瀬国郎
 沖繩県 桑江 良逢 (22・4・17)
 吉田長一郎 (22・7・28)

会報「特攻」第84号正誤表

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

(訂正箇所)
 33頁 2段目前から6行目 誤「少年兵」正「初年兵」
 44頁 4段目前から13行目 誤「プロベラスイッチ」正「プロペラビッチ」
 52頁 2段目前から17行目 誤「大原申造」正「小原申造」
 53頁 下段囲み内11行目 誤「1944(昭和19年)」正「1944(昭和19年)」 2月

当協会会員ご入会のご案内

当協会は、先の大戦において、祖国の安泰を願ひ、家族や大切な人々を案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊をお祀りして慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私たちは、彼らからその精神を学び、現在の日本の現況や自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動が続けております。ご賛同の方のご入会をお願い申し上げます。

○協会の沿革

昭和27年5月設立

平成5年11月財団法人認可

初代会長 竹田 恒徳 元宮様
 二代会長 瀬島 龍三 氏
 現会長 山本 卓真 氏

○協会の主な事業
 ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
 ・講演会等の開催
 ・機関誌等の発刊その他

○年会費
 ・一般会員 3000円
 ・学生会員 1000円

〒105-0014 東京都港区芝2-15-19 TAビル4階
 (財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会事務局
 電話 03-5730-1101
 FAX 03-5730-1101

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。
- 3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要の場合、その旨お書き添えください。
- 5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当協会事務局宛とさせていただきます。

〒105-0014 東京都港区芝2-15-19 TAビル4階
 (財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会事務局
 電話 03-5730-1101
 FAX 03-5730-1101